
世界を救った、よしどうしよう

凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を救った、よしどうしよう

【Nコード】

N6642R

【作者名】

凜

【あらすじ】

俺は1年前、6人の男女とともに異世界に召喚された。

そして、長いようで短かった旅の果てに、魔王を無事倒した。

いよいよ元の世界に戻るわけですが、

周りの6人が元の世界で何をしていたか、今さら知らないことに気付いた。

元の世界に戻って知ったのは、

俺以外はみんな普通じゃなかったこと。

それから、もう1つ。

何故か、帰って来たのに魔法が使えてしまいました。

世界を救って、英雄になったのは別世界。

こちらでの俺は、どこにでもいるような平凡な高校生なのです。

そして、今までの生活は戻りきれなくて、問題ばかりが起きていく。

元の世界に戻るまでがちと長めです。

大体1話2000字弱〜3000字弱ほどと短めです。

更新が遅れがちになっております。

前記3点ご理解頂ければ幸いです。

(改稿は報告がない限りは誤字脱字の訂正です)

【キャラクター設定】（前書き）

キャラクター設定です。

一部、全話読まれていない方にネタバレを含みます。

【キャラクター設定】

【仙崎 淳】せんざき じゅん

異世界では、火、水、風、地、光、闇、氷、雷の召喚獣を従える召喚術士だった。

N高校の2年生。

父親の転勤を機に、田舎を出て一人暮らしを始めた。

成績もスポーツも苦手ではないが、得意でもない平凡な高校生。

こげ茶色の髪に、やる気のない眼を持つ。

身長は異世界から帰ってきて170?。標準体型。

【高崎 涼介】たかさき りょうすけ

異世界では魔道士だった。

N高校の3年生。

人気モデルとして活躍し、夏には映画で俳優デビューも決まっている。

仕事が増えたのを機に、実家を出て一人暮らしを始めた。

身長184?。スタイルと顔はモデルだけあって抜群に良い。

茶色い髪（染めてます）と、切れ長の目、ブラウンの優しい瞳をもち、爽やかな微笑みを浮かべる。

細身だが、筋肉もついている。能天気。

【霧島 壮介】
きりしま そうすけ

異世界では魔道士で、リーダーだった。

霧屋という情報屋を1人で営む25歳。
自宅兼仕事場で1人暮らしをしている。

身長175?。黒髪に黒縁メガネで、エリートのような雰囲気を持つ。

髪はいろいろと弄っていない。

几帳面で、1人で家も霧屋も徹底的に綺麗にしている。

*霧屋

明治時代から代々続く情報屋。

本格的に活動を再開したのはここ30年ほどのことらしい。

一部では有名な情報屋だが、他の人にとってはそうでもない。

【阿南 優華】
あなん ゆうか

異世界では医療魔法を得意とする魔道士だった。

どうもお嬢様らしく、自分のことよりも人のことを優先する女性。

身長157?。髪型は茶色のボブ。異世界でも綺麗に手入れをしていた。

綺麗、という言葉が似合う女性で、くっきりとした目元にブラウ

んの瞳。

【三谷^{みたに} ゆあ】

異世界では天使術と呼ばれる特殊な魔法を使う魔道士だった。

Y 高校1年生、デザイン系学科。

家族、友人などとの人間関係がうまくいかず悩む日々を送っていた。

大きな黒い瞳と白い肌を持つ。身長はやや低めの150?と小柄で、細い。

艶を放つ黒髪は背中中央まで伸びており、前髪は目元で切りそろえている。

声が透き通っていて、可愛い。

【新川^{しんかわ} 雄吾^{ゆうご}】

異世界では、肉体強化という特殊な魔法を使う魔道士だった。

23歳。新平会という業者相手の引越し屋の副会長。

元の世界に戻って少しは筋肉が落ちたようだが、それでも常人の数倍の筋肉をもつ。

それに加え、日焼けした肌と、182?の長身が怖い、という印象を持たせてしまう。

しかし、実際は優しい瞳を持つ、良い兄貴、といった感じ。
敵の前ではその瞳は、狼のように鋭くなる。

*新平会

業者相手の引越し屋。

あたりの高校に行っていないかったり、行ったけど馴染めなかったり、

学校を出て行くあてがなかったような人たちを雇い、少し違う意味で有名な引越し屋。

【神田 黎】
かんだ れい

異世界では魔道士だった。

悪戯と甘いものが好きな大学3年生。 医学部。

栗色のフワフワの髪は特に弄らず、長めの前髪を横に流している程度。

猫のように丸い目は、その辺の女子が羨ましがるほど大きい。

身長はやや低めの165?で、声は高め、暖色系の服を好む、可愛らしい男性。

コーラが好き。コーヒーに角砂糖を大量投入し、カップに沈んだ砂糖を食べる猛者。

T大学医学部に通う超秀才で、暗記力は抜群。

*T大学

この国でもっとも難しいとされる大学。

新たな情報が出次第、追記をしていきます。

もし、書き漏れ等ありましたらご報告願います。

一部、年齢、お仕事等さえも不明なキャラがいますが、後々出ますのでご了承ください。

【キャラクター設定】（後書き）

要望を頂いたので作ってみました。
書き漏れ等ありましたら、ご報告いただけると嬉しいです。

まだネタバレ等はありませんが、
これからのことを考え、一応まえがきに書いておきました。
異世界メンバーしか書いていませんので、
こいつ書いた方がいいよ！！ というキャラがいましたら、
教えて頂けると嬉しいです。

ではでは！！

第1話 魔王倒しました。

「炎の獣イフリートよ!!! 我らの敵を打ちたまえ!!!」

俺の詠唱により召喚された炎に包まれた巨人イフリートが、目の前に居る黒いマントを纏った鬼に喰らいつく。

そして、次の瞬間炎が一気に広がり、鬼の姿を隠した。

しばらく経ち、イフリートと炎が同時に俺が持っていた杖に吸い込まれていった。

それから見えたのは、倒れている鬼の姿。

「負けた……だと。この私が、人間ごときに……」

その言葉を最後に、鬼は動かなくなかった。

「これで、終わったんですね……。魔王、倒したんですね……」

自分の言葉で改めて実感する。目の前で倒れている鬼は魔王。こいつを倒すために旅を続けてきた。そして、今、終わったのだと。

「ああ、長いようで、短かったね」

「そうでうすね、ここに来たときはどうなるかと思ってました」

「さあ、帰ろう、帰ろう!!!」

「うー、戦い終わった途端腹減った……」

「私もお腹空きました……」

魔王との戦闘のすぐ後、とは思えないほどゆったりした空気が俺

を包んだ。

「じゃあ、みんな回復は大丈夫だね？ 帰るよ、城へ」

* * * * *

城門を通り、城内へ入ると、玄関ホールで王女様が迎えてくれた。

「皆様、お帰りさないませー！！ 皆様が帰ってこられたということ
は……」

「そうです、王女様。魔王は無事倒しました。安心してください」

王女と会話しているのはうちのリーダーの壮さんこと、霧島きりしま壮介そうすけ。

「本当に、何とお礼を申せば良いのか……」

王女様は俺たちへどういふ顔を向ければいいのか分からない様子
だった。

「うちのメンバーが腹を空かせてますので、食事を用意して頂けれ
ば……」

壮さんは、そんな彼女に優しくそう言う。

「すでに、お食事、お風呂などは準備できております。また、王や
大臣、他国の王などもぜひみなさんとお食事したいと……」

「いえ、今日は……」

壮さんはメンバー全員の顔を確認した。全員壮さんと目を合わせて頷く。

「疲れもありますし、申し訳ありませんがメンバーとだけで食事を」
壮さんが少し申し訳なさそうにそう言うと、

「そうですね、失礼致しました……！」

と王女様は焦って謝り、

「城の者には私から言っておきます。お食事は食堂にお持ちいただきますので、少しお待ちください」

と続けた。

「すみません、ありがとうございます」

壮さんは王女様に会釈して、俺たちのほうを向く。

「そういうことだから、まずそれぞれの部屋に戻って荷物置いて、出来るだけ早めに食堂に集合ね。さあ、部屋に戻るっ」

彼のその言葉を合図に、全員が自分の部屋へと向かい始めた。

* * * * *

キリグリーマ王国。それがこの国の名前。緑と水に溢れたこの国は、他国からの観光客も多かった。

しかし、1年前、この国にある洞窟に封じられていた魔族が復活してしまった。

それから、国は荒れ、被害は他国にも広がってしまった。

そんな中、キリグリーマ王国を選んだ道は、異世界から7人の勇者を召喚し、彼らに魔族を封じてもらうことだった。

この王国には異世界から世界を救う者たちを呼び寄せる、という魔法が古くから伝わっていたからだ。

そして、召喚されたのが俺たち7人。

突然、全くの赤の他人が魔法や召喚獣が当たり前に存在し、その代わり科学がほとんど進歩していない世界に召喚された、ということだ。

それから1年間共に旅をし、ついに今日魔王を倒した。再び魔族は封じられ、この世界に平和が蘇ったのだ。

* * * * *

部屋に着いて荷物を置き、クローゼットを開けた。

俺がここに召喚されたのは本当に突然のことで、学校からの帰り

道だった。

その時にきていた学校の制服がハンガーにかかっている。ポケットには財布と、電池が切れた携帯と、学生手帳が入っていた。

『N高校 第2学年3組 仙崎 淳』

学生手帳を取り出して開いた。写真の中の俺は、今より少し顔がちが幼い。

身長も今よりも5センチは低かったはずだ。こげ茶色の髪と、やる気のなさそうな目は相変わらずだが。懐かしさに浸っていると、コンコン、と部屋のドアを誰かがノックした。

「淳、急いで、みんなもう食堂にいるよ！」

この声は、魔術師の阿南優華だ。彼女は医療魔術を得意とし何度も俺や仲間を助けてくれた。

この世界に召喚された時から、7人はそれぞれ何か1つ、大きな力を持ち召喚された。

基本的な魔法はみんな使える。つまり、それ以外に特殊な術が使えたり、攻撃魔法が得意だったり、ということ。

俺の場合は火、水、雷、風、地、氷、闇、光の8種族の召喚獣をもつ召喚術士。

それが、この彼女の場合は瀕死状態までもを回復させてしまうほどの医療魔術だった、という訳だ。

「こんなこと考えてる場合じゃなかった……」

小さくつぶやいて、部屋を出た。

「淳っていつつも遅いよね。自分の世界にこもったまま時間忘れちゃってる、っていうか」

「そうかもしれないです。俺も気付いたら、って感じですから」

「だよねだよね!! みんなそう言ってるよ。召喚獣と話してる、って言ってる人もいるけど」

「部屋なんかで召喚したら部屋壊しちゃいますよ。みんな暴れん坊だから」

彼女と笑いながら話していると、食堂についた。

「ささっ、中入ろう? 待ってるよ、みんな!!」

「はい」

彼女が少しドアを開けると、なんとも言えない良い香りが漂ってきた。

第1話 魔王倒しました。(後書き)

記念すべき第1話です！

誤字脱字等ありましたら、ご報告お願いします。
また、アドバイスなどいただけると嬉しいです。

第2話 告白される妄想しました。

食事を終えて、食器などを城のメイドさんが片づけてくれた。今までならば、下らない話を少しして部屋に戻るところだが、今回は違った。

「霧島様、霧島壮介様。お話が……」

リーダーである彼が、王女の執事に呼ばれたのだ。きっと、王女様から何か話があるのだろう。

「壮さん、何の話かな」

「王女様から告白とか……!」

「いやいやいやいや、壮さんより絶対涼介だろ……」

「俺も涼さんだと思います、絶対。ね、涼さん」

そう言っ、俺は涼さんこと高崎涼介たかきりょうすけのほづを見た。

整った顔立ち、切れ長の目の中にあるブラウンの優しい瞳。身長は180センチはあるだろうし、細身だし、筋肉もついている。

それに加えて、爽やかな微笑み、という名の武器を持っているときた。

壮さんだっかってかっこいいが、あちらはどこかエリート、といった感じがする。黒縁のメガネをかけていることと、色々と弄っていない黒髪も関係しているだろう。

年齢的にも壮さんは20代半ばで、涼さんが18歳ほど。

まだ15歳〜17歳ほどである王女様にとってみれば涼さんのほづが魅力的のはずだ。

「いやいやいやいや……、まずなんで愛の告白になってんだよ……。そっから違うでしょ、うん。え？ 誰が言い始めたの？」

明らかに動揺する涼さんを見て、告白だと言いだ始めた優華さんがニヤニヤ笑いながら手を挙げた。

「私だけど……。どうすんの？ 本当に告白だったら」

「仮に、俺か、壮さんが告白されたとしても元の世界に帰らないといけないですし……」

「だから、告白するんじゃないですか？ この世界に残って欲しい、って」

突然耳に入ってきた透き通った声はメンバー最年少の三谷ゆあみたにのものだ。

「そっだよ、うん！！ ゆあ良いこと言うー！！」

次に聞こえたのは、少し高めめの男の声。

神田黎かんだれいだ。俺よりも年上で、とつくに声変わりなんて過ぎてしまっているだろうが、小柄なこともあってか声は高い。

「あーもう！！ うるっせえな……！！ 人様の色恋に口出すもんじゃねえー！！」

きゃっきゃ騒ぐ女性陣と、涼さんをおちよくる男性陣の声を止め

たのは、副リーダーで、メンバーで壮さんに次いで年齢の高い新川しんか雄吾わゆご。

所謂ガテン系、といった感じの彼の声は低く、迫力があり、いつも全員がその勢いに押されてしまう。

「すみません……」

そう謝る黎さんの表情はまだ楽しそうだったが、ちょうど壮さんが帰ってきたこともあり、全員が席に座り直し口を閉じた。

「随分と盛り上がっていたようだけど、何の話？」

壮さんも席について、俺たちに聞いた。

「いえ、なんでもないです……。ね、淳？」

優華さんからの突然のパスをスルーして、

「で、どうしたんです？ 王女様に呼ばれたんですよね？」

と壮さんに聞いた。

「なんだ気になるな……」

と彼は笑いながら、

「王女様と話してきた」

と続けた。全員の視線が一瞬だけ涼さんに向いた気がしたが、最終的には壮さんで落ち着いたようだ。

「えっと、注目してくれてるとこ悪いんだけど、話が長引きそうなんだ。だから詳しくは明日ね。疲れもあるだろうから、風呂入って、早く寝なよ」

壮さんはそういうと、また出て行ってしまった。

「1番疲れてるのは壮さんなのにね……………」

「うん、いつも夜中まで情報まとめて、手紙書いてたし」

「今日くらい休んでほしいな……………」

「そうだな……………」

そんなことを言っていると、なんだか少し空気が重たくなった。壮さんは、いつだって疲れているはずなのに、それを少しも感じさせない。

その強さが、少しさみしくもある。

「俺、風呂入ってきます」

その空気を破ったのは涼さんだった。

「あ、俺も風呂入る！」

「じゃあ、俺も」

それを機に、涼さんに続いて、黎さん、雄吾さんが食堂を出た。俺も、と後をついて行こうとすると、優華さんに肩をつかまれる。

「いい？ちゃんと涼介から話聞いてきてね」

そう笑う優華さんの周りには黒い何かが見えた気がした。いや、見えた。

「じゃあ、ゆあ。お風呂行こー！」

彼女はゆあの方を向き、さきほどまでの黒い何かを一気に振り払

って、満面の笑みで言う。

「はい!!」

ゆあも、同じように満面の笑みでそれに答える。2人は、旅の中で2人だけの女子として仲を深め、今では本当の姉妹のように仲がいい。

そんな2人が食堂から出て行ったあと、俺もあとに続き着替えを取るため部屋に向かった。

第2話 告白される妄想しました。(後書き)

誤字脱字ありましたらご報告お願いします。

まだ、元の世界には当分戻れそうにないですw
ちよっとこっちの世界で色々してから帰ることになります。

第3話 お風呂入りました。

翌日、疲れもあり昼前まで眠ってしまっていた。

寝すぎて重たい体を引きずって食堂へ向かう。こんなに体が重くても、お腹は空くから不思議だ。

「おはようございます……」

誰もいないだろ、と思いつつ、食堂の扉を開けるとそこには壮さん以外の全員がいた。

「淳が最後か……」

「みんなきた時間は、さほど変わらないですよ……」

様子を見る限りでは、みんな先ほどまで眠っていたようだ。目をこすったり、大きな欠伸をしたりしている。

「なんかね、朝ちゃんと起きたのは壮さんだけなんだって」

「へー……。さすがですね」

優華さんの小さな情報に適当に返事をして席に着いた。

「みんな朝食はこれからなんですか？」

「うん、そっだよ。最早昼食だけだね」

朝食を待ちわびていると、隣の席に座っていたゆあに横腹をつつかれた。

（あの、淳さん）

(ん……?何?)

彼女が小声で聞いてきたので、俺も小声で返す。

(昨日、涼さんからお風呂で何か聞きました?)

……どうだったっけ。昨日の風呂でのことを思い出す。

* * * * *

「涼介、実際どうなの?王女様のこと」

「どうもなにも……」

「仮に、でいいから。仮に、で」

俺が風呂に入ると、広い浴室の隅っこ涼さんはうずくまっていた。少し離れたところに黎さんがいる。涼さんをそこから問い詰めている様子。

熱めのお湯に入って、黎さんのもとまで歩いて行く。

「あの、涼さん何か言っていました?」

涼さんに聞こえないよう、少し声を抑える。

「いや、何にも。雄吾さんいるからあんまり深くつつこめないし…

……」

「そうですよね……」

「実際さ、なんで王女様は壮さんと呼んだのかな？」

一番ノリノリで涼さんをからかっていたように見えた黎さんが、そんなことを聞くので、とても不思議に思い、

「どうしてですか？」

と聞いた。

「質問を質問で返すなよ……」

なんて笑いながらも黎さんは話してくれた。

「ほら、魔王倒したわけだし、俺らもこの世界へ戻るんでしょ？」

「まあ……」

「各地を転々としてたから、特に親しい人とかできたわけじゃないし、みんなとは元の世界で会えばいいから、そこは寂しくはないんだよね」

いつもと少し違う黎さんの姿に少し、緊張する。

「でもね、みんなと旅出来ないのが寂しいんだ。みんなとの日常って、1年前までの非日常だから……。だから、もう、同じような生活は出来ないんだな、って思ってる。そりゃ、怪我したり、心まで疲れちゃったり、大変だったけど、それでもやっぱ楽しかった。だから、もし王女様が本当に誰かにこっちに残ってほしい、なんて話したら、元の世界じゃみんな揃うことができなくて、もっと寂しくなるな、って思ってる」

「え……？」

意外な言葉に思わず驚きの声が漏れた。

「大丈夫ですよ、きっと。誰が誰に告白されても、このメンバーと帰る道を選ぶと思いますよ。だから、元の世界で思いっきり1年前までの日常を楽しみましょうよ。もう魔王を倒す旅なんてできないでしょうけどね」

とりあえず、何か言わなければと思って言ったが、黎さんの顔を直接見れなくて少しうつむいた。

「そうだよな、もうこんな洋風の城じゃ風呂に入れないけどな」

黎さんはそう笑って言って、俺の蒸気で少し湿った髪をくしゃくしゃにした。

「何するんですか!?!」

「ん? お前と話してたから、涼帰っちゃった。雄吾さんも」

「え……?」

急いで周りを見渡したが、2人の姿はなかった。

「んじゃ、俺も上がるわ」

黎さんはそういって、浴場をあとにした。

そして、俺はその後、明日女性陣に何て報告しようかと頭を悩ませながら、広い浴場で1人ぽつんと髪を洗ったのだった。

* * * * *

（雄吾さんがいて聞けなかったんだ……）

半分本当で、半分言い訳の言葉で真実を隠した。

（そうですか……。まあ壮さんからの話で王女様が何て言ってたかわかると思いますし。無理いってごめんなさい。ありがとうございます）

ゆあはなんて良い子なんだ、きつと優華さんだったらもっと聞かされてる、なんて思いながら朝食を待った。

第3話 お風呂入りました。(後書き)

帰るまでの道のりって、意外と長いですねw

誤字脱字等ありましたらご報告お願いします。
アドバイス等お待ちしております。

【3月21日】

年齢関係上不自然な言葉づかいをしている点、
少し会話が噛み合っていない点がありましたので修正しました。

第4話 何だか寂しくなりました。

遅めの朝食を終え、片づけも終わったところ、壮さんが食堂に入ってきた。

「みんなやつと起きたんだ」

そう笑う声からは微塵の疲れも感じ取れない。流石というべきなのだろうか。少し複雑だ。

「王女様から聞いたことを説明するんだけど、長くなりそうだし、お茶でも入れてもらおうかな」

彼がそう言うと、すぐに周りにいたメイドさんたちが行動を開始する。

流石は国を治める王が住む城のメイド、と言ったところだろうか。

「じゃあ、ゆつくり説明していくよ」

全員に紅茶とクッキーが行き渡ったのを確認して、壮さんは話を始めた。

「よくよく考えたら俺たちは魔族を倒すことに必死で、帰り方なんて知らなかったよね。昨日呼ばれたのは、帰り方の説明を受けるためだったんだ」

壮さんの声を真剣に聞きたいが、紅茶の甘い香りと、隣で涼さんがクッキーを食べるポリポリという音が邪魔をして、気が抜けた。

「で、どうすれば帰れるんですか？」

黎さんが聞いた。

「まず、前は俺たちがいた世界から、この世界へと来るために時空を超えたんだ。でも、今回はそれにプラスして、時間を超える必要もある」

「時間、か……」

ゆあのその言葉は独り言でも、話をしている壮さんへ向けての言葉でもなくて、遠くにいる誰かに囁いているような感じがした。

「時間を超えるとときに、身体は1年前の姿に戻る。負った傷跡なんかも消え去る、ってということだね」

全てが1年前の、召喚された日に戻る、ということか。

「時空を超えるだけの召喚術ならいつでも行えるそうんだけど……。その逆の転送もね……。でも、時間を超えると1つ条件があるらしいんだ」

「「「条件……？」」」

みんなの声が重なり、思わず顔を見合わせる。

「そそ。条件は満月であることで、次の満月は明後日なんだ」

「明後日……？」

雄吾さんが聞き直した。

「うん。つまり帰る日は明後日。急だよ、本当に……。明日の午

後からは場内で王様とか、他国のお偉いさんとパーティー、明後日の昼間は王国内でパレードするから、好きなことできる時間は短いね。だから、荷物は今日のうちに纏めて、それから好きなことしてね」

本当に、この王国との永遠の別れが近づいているんだ、と感じた。パーティーや、パレードなんて正直面倒だけど、せつかくこっちの世界で英雄になったんだから、最後までやり英雄をやり遂げよう。

「最後の最後で、好きなこと出来る時間少なくてごめんね……」

「そんな、壮さんが謝るようなことじゃないですよ！！それに、私は元の世界で、みんなと会えれば十分です」

そつと微笑んだ、ゆあの一言にみんなが頷いた。

「1年前に戻るときに記憶はちゃんと保護してくれるそうだよ。だから、そこは安心して大丈夫だから。じゃあ、持って帰るものとか、荷物とか早めにまとめてね」

壮さんの言葉にみんなが返事をして、それぞれの部屋に戻った。

* * * * *

午後からは荷物をまとめた。こちらの世界のものを持って帰ることが出来るようなので、愛用していた短剣と、召喚獣を召喚するときに使っていた杖を持って帰ることにした。

召喚獣との契約は、主としての契約から、友としての契約に切り替えた。

これで、彼らは新たな主と契約できるようになる。また、俺も友として彼らを召喚できる。

主が召喚していないときに限るし、俺が召喚していても、新たな主が召喚しようとするれば、そちらを優先しなければならぬが。

でも、元の世界ではきつと召喚できないだろうから、魔王との戦いの後、もう別れをしておいた。

イフリートは俺の数倍ある筋肉だらけの体を震わせて泣いていたな。相変わらず水の召喚獣ウンディーネは美人だったな。

なんて考えていると涙が零れそうになる。

「片づけ、片づけ」

涙をこらえて、ここに召喚されたときに背負っていた、高校への通学用の鞆に荷物をつめこんだ。

第4話 何だか寂しくなりました。(後書き)

帰る兆しが見えてきました。

誤字脱字等ありましたらご報告お願いします。

感想やアドバイス等お待ちしています!!

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます!
すごく嬉しかったです!!

第5話 最後の夕食食べました。

それからの時間は本当に矢のように早かった。

パーティーも、パレードもあつという間に終わってしまった。俺たちはこの世界では本当に英雄になってしまったようだ。

近々、城の中央広場に俺たちの銅像が建つらしい。実際の俺よりかっこよく、とお願いしておこうか。

そして気付けば、もう、最後の夕食。食堂に集まり、みんなの様子を見てみると、最後の夕食は何かとわくわくしているようだ。こういうとき、しめっぽくならないのがこのメンバーの特徴で、俺が大好きなところの1つである。

「はい、グラタンきた!!」

「はい、ピラフとか俺のターン」

「あー……最後にシチュー食べたかったな……」

「ね、このニンジン食べて!! なんか大きい……」

「好き嫌いしないでよ……。はい、キノコあげる」

「ちよ、自分も好き嫌いしているじゃないですか!!」

「気にしない、気にしない」

最後の食事に様々な言葉が飛び交う中、涼が突然立ち上がった。

「あのさ、一応携帯番号とかアドレスとか交換しておきませんか？」

あつちの世界に戻って連絡取りたいですし……」

彼はそう言って、いつから持っていたのか紙とペンを顔の横でヒラヒラさせる。

「お、そういやそうだな。うん、やりますか」

などと、みんなから賛成の言葉が漏溢れだす。

しかし、これが様々な事実を発覚させるきっかけになってしまったのだった。

涼さんから貰った人数分の紙全てに、自分の携帯のアドレスと番号、学校名を書く。

「じゃあ、配りましょうか」

ゆあの言葉を合図に、連絡先を書いた紙を交換し合った。

それからの夕食の話題は、その紙に書かれていることについて。

「え？ 黎さん、彼女いるんですか？ このアドの『sym・io ve』って……」

そう聞いたのは優華さん。きつと sym というのは彼女の名前からとっているのだろう。……さゆみ、とか？

「ああ、いるよ。そのアドレス嫌んだけど彼女がうるさくて。浮気防止ー！！、とか言ってます。元気にしてるかなあ……」

「一言も言わなかったですよね！？ 心配じゃなかったんですか？」
「心配だったけど、言つのもな、って思って。アイツなら大丈夫だろうし」

黎さんはそう言って笑ったが、彼女のことは心配だっただろう。

「壮さん字綺麗ですね……。ってこれ携帯じゃなくて家の番号です

か？」

そう聞いたのは雄吾さん。

そう言われ、壮さんの連絡先が書いてある紙を探し確認すると、確かに字がきれいで、番号は携帯のものではなかった。

「ああ、俺家でする仕事してるから、家の電話の方が便利なんだよね。携帯の番号も下に書いてるでしょ？ 家にかけて出なかつたら携帯にかけて」

「あ、本当だ。わかりました……」

雄吾さんはスープを飲みながら、連絡先が書いてある紙に視線を落とした。

「え？ 淳、N高校だったの!？」

「あ、はいそうですけど……」

「俺も、俺も!!」

「そうなんですか!？ 確か……1つ上でしたよね？」

「うん、そうそう!! ここに来たとき、3年生だった!」

「何で気付かなかったんですかね……」

「ホント!! 不思議だねえ……」

同じ学校だったことが発覚したのは涼さん。

何というか、同じ学校というのは近すぎて、逆に考えなかつたのかも。それ以前に、そんなこと気にしている余裕がなかった、ということが大きいが……。

「2人一緒の学校なの？ というか、みんなどの辺に住んでるの？」

そう聞いたのは壮さん。それぞれが住んでいる場所を言って分か

ったこと。

「みんな近所じゃねえか……」

雄吾さんが驚きを隠せないように呟いた。

みんな歩いていけるほど近いわけではないが、駅で数駅行けば簡単に会える距離だったのだ。

「というか、そんなことも知らなかつらんですね、私たち……」

「ね……。よくよく考えたら名前と年齢くらいしか知らないし……」

「いきなりここに召喚されて、魔族だなんだ言われて……。そんなこと、言うタイミングもなかったですし、言う必要もなかったですもんね」

「そうだよね……。ゆあはさ、高校生だったよね？」

「はい。優華さんは大学生でしたよね？」

「うん、そうそう」

女性陣が話していると、横から涼さんが、

「俺、壮さんと雄吾さんの年知らないんだけど……」

とこっそり聞いてきた。

「え？ 確か、壮さんが最初25だったから今26で、雄吾さんが今24です。最初23だったのです」

そう答えると、ありがと、と呟いて会話に戻った。

「よくよく考えたらどんな仕事、とか、どこの学校か、とか。どんな風な生活してたのか、とか全く知らないんですよね」

ゆあが小さく呟いた。

「じゃあ、元の世界でまた集まろう。せっかく1年も旅して仲良くなっただしね」

そう言い、デザートテイラミスを一口、口に運んだのは壮さん。

「そうですね、集まりましょう!!」

「連絡先もバツチリ分かりますしね!!」

俺ももちろん賛同した。

「なんか、こっちの世界のみんなしか知らないんですよ……。元の世界ではどういう人だったのか、気になります!!」

「だよね!! 涼はもてたんだろ、どうせ?」

「いやいや、黎さん彼女いるじゃないですか!! 淳は?」

何故か黎さんと涼さんの淡いピンク色の会話に突然引きずり込まれた。

「全くですよ……。ははっ」

「何、最後のははっ、って」

「何でもないですよ!! ははっ」

涼さんのツッコミに棒読みのセリフで答える。

「涼、お前は淳と仲良くなれていないな、ははっ」

「ちよ、黎さんまで何なんですか……」

そんな下らない会話を繰り返す中、

「じゃあ、そろそろごちそうさましまししょうか」

と、みんなのデザートのお皿が空になったのを確認して、ゆあが切り出した。

「そうだね。じゃあ、15分後荷物をまとめてここに集合ね。城の人に魔方阵があるところまで案内してもらおうから」

壮さんの言葉につなずいて、部屋へ戻った。

* * * * *

部屋に戻り、荷物を持って食堂に向かった。
すぐに全員が集まり、地下の魔方阵が書かれている部屋へと案内される。

薄暗い部屋を照らすのは蠟燭だけ、というなんとも不気味な部屋だ。レンガ造りの壁や、古い本が山積みになっているボロボロの机などが、その雰囲気を一層もり上げている。

「ここ、俺たちが召喚されたところだよな」

「そうですね、懐かしいです」

思い出すのは1年前、何か宙に浮くような感覚に襲われて、気付

いたらここで7人そろって尻もちをついていたときのこと。

「あれ、痛かったです」

「まあな……」

そんなことを雄吾さんと話していると、先ほど俺たちが通ってきた扉があき、王女様が部屋の中に入ってきた。

彼女は、ドアから数歩入ったところで、

「今から記憶を保護して、皆さんの世界へ転送します。最後に、私からもう一度お礼を言わせてください」

と言い、美しいブロンドの髪をなびかせ俺たちのすぐ前まで歩いてきた。

第5話 最後の夕食食べました。(後書き)

ようやく帰るようです。

誤字脱字等ありましたら、ご報告くださると嬉しいです。
感想やアドバイス等もお待ちしています。

第6話 元の世界に帰りました。

「1年前、突然お呼びしたのにもかかわらず、このように、私たちの世界を救っていただきありがとうございました。本当に、皆様がいなければ世界は崩壊していました……。このようにお送りするこ
としか出来ず、申し訳ありません……」

彼女はそう言って、深く頭を下げた。

「年前の、この世界へ来た瞬間にお送りします。過去の皆様が、
こちらの世界へ召喚されたすぐ後へ……。では、記憶の保護を」

王女様がそう言い、一歩下がると兵士が俺たちに魔法をかけてく
れた。

何だか、頭がふわふわしたが、10秒ほどでその浮遊感は解けた。

「では、魔方陣の中央へ」

王女様の言葉に従い、俺たちは魔方陣の中に入り、中央に立った。

「時を覆いし空の使者、空間を守りし水の使者、ここにありてなき
……」

王女様は魔方陣の外側から、詠唱を始めた。

「今、すべてを在るべき時へ、場所へ戻したまえ！！」

彼女の詠唱が終わった途端魔方陣の線が青く輝き、何かを吸い込
むような大きな音とともに、辺りは青い光で満たされる。

「本当にありがとうございました！！皆さんのこと、一生忘れません！！」

ゴゴオ、という音にかき消されぬように、王女様が叫んだ。

「こちらこそ、いい思い出になりました！！忘れませんから！！
さようなら！！」

優華さんが、そう返事をして手を振る。

「さようなら！！ さようなら！！」

王女様の言葉を最後に、音が途切れ青い世界が白に変わった。

* * * * *

視界が晴れて、周りが見えてきた。隣を走る車。少し遠くに見える電車。アスファルトの道路。黒い髪に黒い瞳の人たち。ランドセルを揺らしながら帰る小学生。家の前を掃くおばあちゃん。

「戻ってきたんだ……。俺……」

呟いて一歩踏み出すと、つい先ほどまでより制服が少しゆったりしていた。

身体が1年前に戻ったようだ。せっかくついた筋肉と、少し伸び

た身長がなんだかもつたいない。

「どうしたんだよ、異世界行ってきましたみ、たいな顔して」

後ろから突然声をかけられ振り向くと、そこには友達みどりかわの緑川 慎しんの姿があつた。

彼のその冗談に思えない冗談に、少し戸惑う。

「いや、考え事」

「そっかそっか……」

1年ぶりに姿を見るのに、それは記憶の中の姿と全く変わらない。当たり前なことだが、少し不思議な気分だった。

「なあ、明日の球技大会に、3年生のモデルしてる先輩が参加するらしいぞー!!」

「へ……? 何のこと?」

「お前知らないのか?」

慎と俺は利用している、学校近く駅へ向かって歩き始めた。彼とは家が近いため、一緒に帰ることが多かったのだ。

「あ、そっか。淳、今年からこの学校に来たんだよな?」

「え……」

忘れていた。今日は4月28日。水曜日。俺は、今年N高校に編入した。明日は球技大会。そんなことを今さら思い出す。

「うん、そうそう」

「あのな、俺も名前は知らないし、見たことないんだけど、モデル

やっててすげえかつこいい先輩が3年生にいるらしいんだ。全校が集まるときとかは学校休んで、仕事に行くらしいんだけど球技大会には出るらしい」

「へえ……そうなんだ」

「なんか女子どもがなんとか、って名前言ってたんだよね……。結構すごいらしいよ、うん。雑誌の表紙……とか？」

芸能とか、そういうことに全く興味がなかった俺は適当に話を聞き流し、駅に向かって歩き続けた。

* * * * *

「ふー……駅着いた、着いた」

慎は、そういつてホームのベンチに腰を下ろした。

「おっさんみてえ」

「なんか言った？」

「いえ、なんにも」

下らない会話を繰り返していると電車が入ってきた。乗るのは1年ぶりか……。懐かしい。

「ほら、さっさしろよ乗り遅れるぞ」

「あ、うん」

それからの帰り道は懐かしいものばかりだった。

スカートの短い女子高生、イヤフォンで音楽を聴く学生。買い物
帰りの主婦に、スポーツバッグをかった野球少年。

全てが本当に懐かしくてたまらなかった。

第6話 元の世界に帰りました。(後書き)

やっとこさ帰りました。長かった……と思います。

誤字脱字等ありましたらご報告お願いします。

また、感想やアドバイス等も大歓迎です。

そして、お気に入り登録して下さっている方、

評価して下さった方、コメントを下さった方、

たくさんのアクセスなど……。

本当にありがとうございます!!

自分が想像していたより、ずっとたくさんの方に、

読んでいただけているようですごく嬉しいです!!

これからも、よろしくお願いします。

第7話 学校にいきました。

「ただいま……」

慎とは駅を降りてすぐに別れた。1年ぶりに、駅から自宅まで歩いたが、無事迷わず着くことが出来た。

意外と道って覚えてるんだな……。

俺の家は、ワンルームマンションの2階だ。

先月の3月、父親の海外転勤が決まり、母親がついていくことになったのを機に、思い切って1人暮らしを始めることにした。

今まで家族で住んでいた家は知人に貸し、店やコンビニ、街が近いここに引っ越してきたのだ。

そのせいで、高校を転校しなければならなかったが、それよりも新しい生活に対する期待のほうが大きかった。

そんな記憶と一緒に、携帯の充電コードの在りかを思い出して、携帯を充電した。

しかし、確か切れてしまっていたはずの携帯の電池は切れていない。

確か、あちらの世界で連絡を取ろうとしていたら、電池が切れたんだっけ。人だけでなく、物も1年前の状態に戻っている、ということか。

携帯を開くと、

『新着メール 3件』

と、画面の左上に表示が出ていた。

「誰だろう……」

小さく呟いて確認すると、3件とも未登録のアドレスからだった。しかし、どこかで見たアドレスだと思い確認してみると、涼さんと、優華さんと、ゆあからだった。

全員に届いてます、とだけ返して、メールが来ていない壮さんと、雄吾さんと、黎さんにメールを送っておいた。

それからは、何もすることがなく、棚の中にあつたカップラーメンを、1人寂しく食べ、早めにベッドに潜った。

今まで俺、1人でなににして時間を過ごしてたんだっけ。1年間、旅の中で1人なることがなくて、もう忘れてしまった。

そして、必死に考えても、思い出すことはできなかつた。

* * * * *

翌日。球技大会が行われる日。

「おはよう」

と、軽く挨拶をして教室に入ると、何人かが返事をしてくれた。球技大会は1日かけて行われるため、体操服で登校することになっている。

教室に体操服姿の人が溢れているのは何となく不思議な光景だ。

「おい、仙崎!！」

誰かに苗字を呼ばれ、声の主を探すと、

「俺、俺!！」

と1番前の席に座っていた男子が手を上げた。

「仙崎サッカーだったよね、ポジションどうする?」

彼は、紙とペンを持ち聞いてきた。体育委員だったような気がする。

サッカーを選んだ記憶もないし、どんなポジションがあるかなんて知らなかったので、

「どこでもいいよ!! 出来ればベンチ」

と、飛びつきりの笑顔でそう言うと、

「あー……人数1人多いし仙崎がそれでいいなら。もちろん、怪我とかしたやつが出たら代わってもらうけど」

と了承してくれた。いいのかよ、そんなんで、とか思いつつ、俺にとってはそれ以上ない良いポジションなので頷いた。

ホームルーム始まらないかな……なんて思っていると、クラスの女子が突然騒ぎ始めた。

「ほら、あの先輩だよ、モデルやってる……」

「初めて生で見た……。まじかっこいいじゃん」

「背高いし、顔小さいし……」

「てか、なんで3階に来てんの？ 3年生は2階でしょ？」

「いいじゃん、見れるだけ！」

「この前、雑誌の表紙載ったらしいよ……」

「映画にも出るらしいよ……」

昨日慎が話していた人だろう。

この学校には普通教室や、職員室がある普通校舎と、理科室や音楽室などの特別教室がある特別校舎がある。

普通校舎の1階には職員室や校長室があり、2階には3年生、3階に2年生、4階に1年生の教室がある。

よつぽどの用事がない限り、3年生が2階に上がってくることはないはずだ。

まあ、俺にとっては彼がどんな理由で2年生の階にこようが知ったこっちゃない。

「淳、どうした？ また考え事？」

後ろから話しかけてきたのは慎だ。

「いや、別に……」

「そっか、ほら女子が今窓から見て騒いでるのが昨日言ったモデルの先輩。すげえよなあ、同じ学校にモデルいるとか……」

「そーだねー」

「お前興味なさすぎだろ……。ま、そうだと思ってたけど」

慎はそう言って笑うと、窓側までその先輩を見に行った。その間

も、変わらず女子は騒ぎ立てる。

「え？ 3組に来てない？」

「うっそまじ!？」

「やばい、今日寝癖ひどいんだけど」

「てか何で3組？」

「なんで3組に？ お目当ての人がいる……とおかあ!!!？」

最後の女子の一言で更に女子が騒ぎ出す。

大丈夫、多分君たちじゃないから、と心の中で呟いてあげた。

女子たちは教室の後ろに固まり、先輩の到着を待っている。

そして、その先輩が教室の前の扉を開けて入ってきた。

「じゅーん君いますか？ 仙崎じゅーん君」

「へ……？」

突然名前を呼ばれ、変な声が漏れた。まさか、そのモデルの先輩……って……。

「お、いたいた！ 突然ごめんな、淳！ちょっと暇つぶしに来てみた!！」

まさかのまさか。我が学校が誇るモデルは、1年間共に旅した仲間でした。

1年前に戻った体は少し筋肉がおちて細くなった印象を受けた。しかし、相変わらずのスタイルの良さと、爽やかさ。優しそうな目と、綺麗に茶色い髪をセットしているのも相変わらずだ。

「仙崎ってどういう関係なの？」

「あいつ転入してきたばっかだよ……」

「高崎先輩も転入してきたばっかだったよね、確か……」

「前の学校が一緒とか？」

「なら、もう教室来てもおかしくないでしょ？」

「うん、なんか……やだ」

涼さんが転入してきたばかりだった、という新たな情報を得たのはいいが、一気にクラスメイトの注目を浴びてしまった。

もちろん、悪い意味で。

涼さんは、訳が分からず戸惑う俺の心の中なんて知らず、ニコニコ爽やかスマイルを浮かべ、俺の席へ駆け寄ってきた。

「球技大会、何に出る？」

更にニコニコして聞いてくる涼さんの手首を思いつきり掴んで、彼の顔を見る。

「ちょっと聞きたいことあるんで……」

「え？ 何？ こじやダメなの？」

「いいから、いいから……」

涼さんの細い手首を強く握ったまま立ち上がり、突き刺さるクラスメイトからの視線を無視して、教室から出るため歩き出した。

「やー……、仙崎が連れてく……」

「何で……。もっと先輩見たかった!!」

「つか、仙崎のくせに先輩に対して乱暴じゃない？」

「思った、それ……」

「今日、あいつ教室帰ってきたら何もかんも全て吐かせてやる」
「おっ、いいね……。やっっちゃおっか」

視線とともに、女子の言葉も心にグサグサ突き刺さる。
もうどうなってもいい。全責任は涼さんに押し付けてやる。
なんて思っても、本当は教室戻るのがちょっと怖い気もする。

様々な思いが脳内を巡る中、大勢の生徒の視線を跳ね飛ばして廊下を歩いて行った。

第7話 学校にいきました。(後書き)

涼さん。

誤字脱字等ありましたらご報告いただけると嬉しいです。
アドバイス、感想等もお待ちしています。

小説をお気に入り登録してくださったかた、
凜をお気に入り登録してくださっている方、
本当にありがとうございます!!
やる気が出ます。頑張ります。

第8話 更に近づけた気がしました。

「何……？　こんなとこまで来て……。朝のホームルーム始まつちやうよ？」

彼を引っ張り、連れてきたのは普通校舎1階のトイレ。

1階にはトイレが2か所あるが、職員室から遠い方のトイレを選んだ。

「あの、涼さん4月にここに転入してきたんですか？　……って。こんなことよりも、何よりも！！　モデルだったんですか？　なんか、映画とか雑誌とか色々出て活躍してて、それで、ほら、あの……」

まだ、頭が混乱していて、言葉がまとまらない。

それに加えて、早足で来たため少し息が切れていて、言葉が出辛く、何と言っているか、涼さんが理解できたかどうかさえ危うかった。

「んー、まあ全部本当だよ」

理解出来ていたのか。……いや、それよりも肝心なことがある。

「本当……って……」

「そそ。俺は事務所に入ってた、モデルやってんの。ついでに言えば、7月に銀幕デビュー、みたいなの？」

いつもと変わらないノリで話しているが、話している内容はすごいことだ。

「まあ、俺が転入してきたことと、モデルやってることは繋がってるんだよね」

「教えてくれれば良かったのに……」

軽い気持ちで言った一言。

「教えて何が変わった？」

なのに、帰ってきた言葉はとても重たかった。

いつもより少し低くて、小さくて、元気のない声に不安が募る。

「何てねー。ほら、みんな気付いてなかったし、言う機会もなかったし。まあ、別に魔王倒すのにそんなこと関係ないかなーって」

涼さんはそう笑って言って、俺の頭をぼんぼんと叩いてトイレから出て行った。

彼の笑う顔を見て思った。本当は言いたくなかったんじゃないかな、って。

きつとそう言えば、みんな変に気を遣っていたかもしれない。

そうやって、特別扱いされることが彼には苦痛だったんじゃないだろうか。

そう思って、気づいたら涼さんを追いかけて、腕を掴んでいた。

「俺は、別に涼さんがモデルだから、って特別扱いしませんから」

そう勢いに任せて言った方がいいが、何だか恥ずかしくなってきた。

「いや……。あの……。気にしないでください」

腕を慌てて放して、涼さんを置いて、廊下を早足で歩いた。
今、涼さんどんな表情してるだろう……。こいつアホか、とか思
ってるのかな……。

そんなことを考えながら歩いていると、誰かにまた頭をぽんぽん
と叩かれた。

「涼さん……？」

思いあたった人の名を呟き、後ろを振り返ると、そこにはいつの
間に俺に追いついたのか、満面の笑みを浮かべる涼さんがいた。

「なんかさ、ありがとう」

彼はそう言っつて、また頭を叩く。

「子供あやしてるようなことしないでくださいよ」

「え？ 子供あやしてるつもりだった」

「え！ 酷い！」

彼の脇腹を小突いて、また早足で歩きだした。

教室への帰り道、さきほどの一件は涼さんが謝ることで無事解決
した。

彼はまだ納得しきってはいないようだったけど、それは見ないフ
リ。

そして、彼は自分のことを話し始めてくれた。

「お前のいう通りだよ。特別扱いしてほしくなかったただけなんだよ

ね。仕事あるから、って地元出てここの学校に来て、最初は楽しかった。でも、たくさん仕事を頂けるようになって、みんな俺が雑誌とかで、モデルしてるの知った途端態度変えてさ。特別すごいわけじゃないのに、そんな風にされてすごい嫌だった」

「そうなんですか……」

どつという表情をすればいいのか分からず、俯くことしか出来なかった。

「で、みんなと一緒にあつちに召喚されて、誰も俺がモデルって知らなくて、ラッキーだ、って思ったんだ。だから、言わなかった。でも、無駄な心配しなくて良かったな。アホみてえだ」

そつ笑つ涼さんの表情はいつもの顔だ。

「そうですね、今考えてみると、身近にモデルがいてどうこうとかより、突然異世界に召喚されて魔王倒して帰ってくる方が数倍大変ですよ」

「そつだよな。……そつだよな！！　　すげえな、おい」

「今さらですか？」

彼と話しながら階段を上り2階まで来た。

3年生の教室は2階、2年生の教室は3階にあるため、涼さんとはここで別れることになる。

「じゃあ、いいね」

そつ言つて手を振り帰るつとすると、

「あ、ちょっと待って、今日何に出る？」

と涼さんに呼び止められた。

「サッカーです。涼さんは？」

「俺も俺も！！」

同じサッカーであると分かった瞬間、彼はとても嬉しそうだった。

「じゃあ、また後で」

ん？ 同じ種目だけど、学年違うし……。

試合するのだろうか？というか、球技大会のルール知らないや……。

まあ、後でどうにかすればいいか！そんな事を考えながら涼さんに手を振り、教室へ戻るため階段を上った。

第8話 更に近づけた気がしました。(後書き)

涼さん、その？。

読んで下さりありがとうございます。

誤字脱字等ありましたらご報告頂けると嬉しいです。

感想やアドバイスもあれば、ぜひぜひお願いします。

お礼と、これからについて活動報告で書かせて頂きました。

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/132760/blogkey/158925/>

お時間のある方は目を通していただけたらな、と思います。
ではでは。

第9話 球技大会開幕しました【上】。

朝のホームルームを終え、全校生徒がそれぞれの会場に集まった。男子はサッカーかバスケット、女子はソフトボールかバレーに分かれている。俺が参加するサッカーの会場は第2グラウンドだ。

「っしやー！！ 絶対勝つぞー！！」

「「「「「おおー！！」「」」」」

我がクラスが誇るサッカー部2年生エース菊池をキャプテンにし、サッカーに参加する全クラスメイトで円陣を組み、気合を入れる。

「キャプテン、1回戦の対戦相手はどこですか！！」

「緑川慎君、良い質問じゃないか。1年4組だ！！ 1年生だからって油断するんじゃないぞ！！サッカー部も多にいるからな！！」

「はい、キャプテン！！」

ノリノリの慎と、同じくノリノリの菊池がコントのような会話をしている中、俺は先日配られていたというルールが書かれたプリントに目を通していた。

『競技大会ルール』

参加者は本校に在籍する全生徒である。

学年、クラスを問わずにトーナメントを組む。

何回勝ったか、により各クラスにポイントを与え、4種目合計の

ポイントが1番多いクラスが総合優勝となる。

(各学年、最下位のクラスはグラウンド及び体育館の清掃を放課後に行うこと)

最後のルール、聞いていないんですけど……。

とりあえず、最下位にだけはなりたくない。ポジションベンチの名に懸けて、なんとしてでも阻止しなければ。

「淳、俺ら出るのBコートで2試合目ね。それまで準備しとけ、だつて」

「あ、うん。分かった」

サッカーは本来ならば前半、後半とあるが、そうしては時間が足りない。

そこで前半と後半をなくし、25分の試合時間で1試合としている。

それに加えて、グラウンドにコートをAとBで2つ作り、同時に試合を行い、なんとか時間が足りるよう努力しているのだ。

試合時間まで何をしようか悩んでいると慎が俺に近づいてきた。

「お前、高崎先輩とどういう仲？今クラス中その話ばっかなんだよ」

ああ、そういえば、まだ誰にも何も話していなかった。

あれから、教室に戻ったころにはもう担任が来ていて、俺が席に着くと同時にホームルームを始めてしまったので、聞きに来る時間がなかったのだ。

「ただの友達だよ。うん、普通に」

「いや、すげえ仲良く見えたし……。いつから友達なの？」

「1年くらい……。前？」

「そうなんだ！！ えっ、すげえ！！ きっかけは？」

異世界に一緒に召喚されたからです、なんて言えるわけもなく、

「まあ、友達の……。紹介？」

と適当にごまかしておいた。しかし、何故か慎がニヤニヤしているのだ、

「ん？ 何？ 変なこと言った？」

と聞いてみると、より一層顔をニヤつかせて、

「噂をすれば……。高崎先輩だよ」

と俺の後ろの遠くを指さした。

「ん……。？」

彼がさす方を目で確認すると、確かに涼さんの姿。

「おい！！ 淳！！」

しかも俺の名前を叫びながら駆け寄ってくる。

「どうしたんですか？ 涼さん」

「ちょ、悪いけど、こいつ借りるわ。ごめんなー!!」

駆け寄ってくるなり、慎にそう言っ、今度は涼さんが俺の腕を掴み、何の説明もなしに俺を引っ張ってどこかへ連れて行く。

「どうしたんですか、突然……」

「いや、今壮さんからメールあって、確かめたいことがある」

「……壮さんから？」

「いいから、早く……」

慌てている彼の姿を見ると只事ではないことが容易に想像出来る。だから、それから何も言わず、彼に引っ張られるまま走った。

第9話 球技大会開幕しました【上】。(後書き)

涼さん、その4

(3は、私にメッセージを下さった方が言って下さったので)

読んで下さりありがとうございました。

誤字脱字等ありましたら、ご報告くださると嬉しいです。

アドバイス、感想等もお待ちしています。

ではでは。

第10話 球技大会開幕しました【中】。

涼さんに連れてこられたのは、職員を含めた全員が球技大会に出払い、誰もいなくなった普通校舎2階の廊下。

「何ですか？ 確かめたいことって」

まだ整わない呼吸の中、一生懸命に声を出す。

異世界では何キロも走って、戦って、召喚獣を召喚して、魔法を使って、と出来ていたのに今では少し走ったり、階段を駆け上がり、ということさえきつくなっている。

朝、涼さんをトイレまで連れて行ったときもそうだったし、今もそうだ。

1年前の俺は、こんなにも運動不足で体力のない人間だったのか、と痛感させられた。

「それが……」

そんな俺とは裏腹に、息を荒げる様子のない涼さんは、肩で呼吸をする俺を心配そうに見ながら、左手の手のひらを上に向けて、胸元まで持つてくる。

「……？」

訳が分からず混乱する俺をよそに、先輩はそのまま数日前まで当たり前前に口にしていた、この世界では何の意味もなさないはずの言葉を呟いた。

「輝きを与えたまえ……」

これは光属性の魔法の詠唱。

「何でこんなときに光魔法なんか……」

彼の行動の意味がくみ取れず、思わず笑ってしまったそのすぐ後。

「なん…で…?」

彼の手のひらの上にはしっかりと光の球が浮かんでいた。

これは光属性下級魔法のシャイニーだ。

攻撃能力も防御能力もない、軽く自分の周りを照らすだけの魔法。

「こんな下級魔法だけじゃない。シャイニングレイみたいな上級魔法も、
ファイアとか、サンダーとか、他の属性の魔法も全部使えたんだ

……」

あちらの世界に召喚されて、突然全員魔法を使えるようになった。だから、こちらの世界に戻れば当然魔法は使えなくなるものだと思っていた。

俺は召喚術士として召喚されたため、あまり多くの魔法を扱えなかったが、魔道士として召喚された涼さんや、壮さん、優華さん、黎さんはたくさん魔法を扱える。

それに加えて、雄吾さんは、肉体強化という特別な魔法が使えるし、ゆあは、天使術と呼ばれる更に特別な魔法を扱える。

それらすべてが使える、となればこの世界の『常識』を完全に壊してしまう。

「で、壮さんが確認取ったところ、雄吾さんの肉体強化も、ゆあの天使術も全て扱えるということらしいんだよね……。そこで、あと確認がとれてないのがお前、ってこと」

この世界で、また召喚獣のみんなと会える喜びと、この世界の、道理が崩壊してしまうという危機感が合わさり、なんとも不味い感情が出来上がった。

「お前、携帯教室に置いてるだろ？ それで連絡取れなかったから、俺に連絡来たんだよね」

「そうなんですか……」

壮さんがこのことに気付いたのだろうか？

魔法が使えなくて当たり前の世界にきて、『魔法が使えるか試そう！』なんて、彼が考えるようには到底思えなかった。

「とりあえず……。杖ないと召喚出来ないんでしょ？」

「そうですね……。杖は家にあります」

「なら良かった。召喚する状態は整ってる、ってことか……。あとは場所だけだね……。誰にも見られない、スペースのある場所、か」

召喚獣のみんなはとても大きかったり、周りにあるものを燃やしてしまったり、凍らせてしまったり、人の姿をしていなかったりと、一般市民に見られるわけにはいかない。

「やっぱり、そこが1番難しいですね……」

「まあ、今日みんなと放課後に駅前で会うことになったから、そのとき考えよう？」

「……はい」

早く召喚できるのかどうか、ということを知りたかった。
しかし、その自らの欲でこの世界に迷惑をかけるわけにはいかな
い。

言い表しようのない、何とも言えない複雑さがあった。

「そこで、重要なことが1つあるわけですよ、淳さん
「……なんですか？」

彼は、いつものテンションで聞いてくる。

「最下位のクラスは居残り掃除だよね？そんなことしてたら皆と会
う時間、無くなっちゃうよ？」

「……あっ」

「そういうことだから、大切なことは？」

涼さんはこういうときでもいつでも楽しそうに聞くから、こちら
の緊張感までも吸い取っていつてしまう。

でも、同時に暗い気持ちとか、そういうものまで吸い取っていつ
てくれる気がする。

「絶対に最下位だけにはならない……」

涼さんの目を見て言うと、彼は静かにうなずいた。

「ってことで、絶対に勝つぞ、このやるー」

「そうですね、負けてたまるか、このやるー」

「とりあえず、1回でも多く勝ってポイント稼ぐぞ……」

「そっつすね、先輩。俺、ついていきます」

「おっ……。しっかりついてこい」

複雑な気持ちは涼さんに吸い取ってもらい、下らない会話をしながら、グラウンドへと戻るため歩き始めた。

* * * * *

グラウンドに着くと、慎が俺を探していた。

「いたいた！！ もう試合始まるから早くしろよ！！」

「悪い、悪い！！」

慎に謝り、

「じゃあ、そついで……」

と、涼さんに言い急いで試合が行われる場所に向かった。

「あ、高崎先輩がいるクラスとは上手くいけば決勝で当たれるよ？」

決勝とか、優勝とか、そういうことは今はどうでもいい。

とりあえず、お互い上手く勝ち上がればポイントが稼げることが分かり安心する。

1回戦や2回戦で当たってしまえば、そこでどちらかのクラスが、ポイントをあまり稼げず敗退。居残り掃除への道が近づいてしまうのだ。

「まあ、お前ベンチだし気楽にいけよ」

「おう、頑張れ……。絶対に負けんなよ……」

「あ……。はい。何？ 突然気合入っちゃって……」

不審がる慎を横目に、試合会場へ向かう足を速めた。

第10話 球技大会開幕しました【中】。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

誤字、脱字、感想、アドバイス等ありましたら、感想かメッセージで、

ぜひお願いいたします。

第11話 球技大会開幕しました【下】。

第1試合が始まった。

1年生と2年生では技術云々ではなく、まず体格が違う。

我れらが誇りのキャプテン菊池は身長187cmと特に体が大きく見えた。

もちろん、技術でも1年生チームを大きく上回り、無事、勝利を収めた。

「淳、見た？ 勝った、勝った！！」

この試合で1得点を決めた慎が、ハイテンションで俺に抱き着いてくる。

「分かった、分かったから、熱い！！ 離せ！！」

先ほどまで走り回っていた彼は、とりあえず暑くて、むさ苦しい。そんな彼を全力で振り払って、涼しさを求め、木陰へと歩き出した。

* * * * *

それから、俺のクラスも涼さんのクラスも順調に勝ち上がった。うちのクラスは体格で勝る3年生チームにも勝ってしまったのだから技術は高いのだろう。

そして、何と決勝戦まで行ってしまった。
しかも、対戦相手は涼さんのクラス。ああ、怖い、怖い。

「ここまで来たんだ……。絶対優勝するぞ!!!」

今までに増して気合の入ったキャプテン菊池と、メンバーたち。
ベンチの番人としての地位を確立した俺も、円陣には参加させて
もらえた。

「このクラスにはサッカー部キャプテン郷田先輩しゅうたがいる。

今までの試合を見る限りでは、長身の高崎先輩もいい動きを
されている。

この2人をとくに注意していけば、優勝も夢じゃない……」

さすがは菊池。しっかりと敵を観察していたようだった。

それにしても、涼さんはスポーツまで出来るのか。最強だな。

「3組、いくぞ!!!」

菊池の掛け声に、むさ苦しい男どもが熱い雄叫びで答え、円陣を
解いた。

ここまで勝ち上がったんだからポイントは十分稼げているはずだ。
ここは、3年生に勝ちを譲るのが後輩ってもんじゃないのだから
か？

そんなことを考えながら、大きな欠伸をして、ポジションにつ
いた。

ベンチに座って、ただ試合を観戦する何とも楽なポジション。

「では、これよりN高校球技大会、サッカー部門決勝戦を始める！」

主審の先生の合図で、並んだ選手が礼をする。

こう並んでいるところを見ても、菊池と、郷田先輩と、涼さんは、頭がひよこんと飛び出している。

両チーム全選手がポジションについたところで、試合開始のホイッスルが吹かれた。

流石は決勝戦、どちらのチームも一步も譲らない展開、かと思っただが、それも試合開始10分ほどの間だけで、残りの時間はなんとも呆気ないものだった。

3組には、2年生エース菊池をはじめ、4人のサッカー部がいたが、サッカー部キャプテンの郷田先輩をはじめ、サッカー部レギュラーが7人もいるチームに、体格でも技術でも劣る2年生チームが勝てるわけがなかった。

次第に体力を削られたこちら側は動きが鈍り、呆気なく1点を取られてしまい、それからはボールをまわし、時間を潰され試合終了。1日に数試合を行い、疲れていたとはいえ、見ている側からしてもなんともつまらない試合だった。

「勝者、3年4組。では、互いに礼！」

やっと今日の勤務が終わった、とでもいうような気合の入った審判の先生の声に、合わせて礼をし、目の前にいた選手と握手を交わ

した。

「いやあ……、思ったより体力落ちてるね……。まっ、君は試合に出ていないからどうせ分かんないだろうけど」

目の前にいるのが誰か、なんて確認していなかったが、この言葉だけで容易に想像がつく。

「ポジションベンチは、試合を広い視野で見ることでの確に指令を下す、チームの頭ともいえるポジションですから」

だから、そのイラつく言葉を送ってくれた彼……涼さんに、そう返して、握手の手を解いた。

「なんかムカつく……」

そう呟く彼に、

「ありがとう」

とだけ、飛びっきりの笑顔を添えて言ってあげた。

涼さんは俺に何か言葉を返そうとしていたが、審判をしていた先生の、

「えーじゃあ、全員教室に戻って最終結果を聞くように、以上解散」
「！」

という言葉に遮られ、結局俺に言葉を返すことはできなかった。

先生の言葉の後に、俺に何か言うこともできただろうが、それは解散を待っていた女子が彼のもとにすぐさま集まってきたことで、

不可能となつてしまった。

「涼君、お疲れ様!!」

「先輩、カツコよかったです!!」

「カツコよくて、運動まで出来るなんて……」

女子の甘い声に囲まれた先輩は、営業スマイルを彼女たちに向けた後、助けを求めるように俺の目を見てきた。

そんな彼に、口パクで『お幸せに』とだけ言って、手を振り、慎と一緒に教室への道を歩き始めた。

「いいのか、先輩のこと」

慎は、涼さんのことを気にしているようだったが、

「いいんだよ、あの人には。ちょっと冷たいくらいが丁度いい」

とだけ言って、振り返ることなく教室へ戻った。

第11話 球技大会開幕しました【下】。(後書き)

慎くーん。

読んで下さりありがとうございます。

球技大会、本当は5話くらいかけてやるつもりでしたが、なんか必要なさそうなので省きました。

誤字脱字等ありましたらご報告いただけると嬉しいです。
感想等もお待ちしています。

第12話 女の子に会いました。

6クラス中4位という、なんとも微妙な結果で掃除を免れた俺は、靴箱で涼さんを待ち合わせをしていた。

慎に聞いた話では、涼さんのクラスは3年生総合優勝だったらしい。

全種目決勝戦まで進出していた、という何ともすごいクラスなのだ。

「おい、淳!! 待った?」

廊下を小走りに、涼さんはやって来た。

「いえ、俺もさっき来たところですから」

「なら、良かった……。ささっ、みんなに会いに行こう!!」

彼は、そういつも通りの爽やかスマイルで言うと、俺の両肩を持って、俺の体を押しながら歩き始めた。

子供のころにやった、列車ごっこのような、恥ずかしい……。なんて思っていると、

「線路は続くーよ、どーこまでもー」

なんて涼さんが歌いだすものだから、周りの視線を一気に集めてしまい、更に恥ずかしくなってしまうた。

「ちよ、止めてくださいよ……」

彼の手を振りほどいて、自分の靴を取りに行き、スリッパを脱い

で履き替えた。

そして、靴を履きかえた涼さんと駅に向かって歩き始めた。

俺が住んでいるマンションの最寄の駅から、3駅行ったところに学校からの最寄駅がある。

その駅から、更に3駅いけば、高層ビルが立ち並ぶ街に行け、更に2駅いけば、超高層ビルが立ち並ぶ街に出るのだ。

わずか数駅離れるだけで、住宅が立ち並ぶような場所から、見上げるほど高いビルが立ち並ぶ街に出られるのだから、何と便利な場所だろうか。

「なんかさ、平和だよな、本当に」

突然、涼さんが言い始めた。

「どうしてですか？」

当然だけれど、俺はそう聞く。

「いや、なんとなーく。今までの生活がおかしかったんだろうけど、そっちに慣れちゃうと、今度はこっちの世界が平和すぎる、っていうか……。魔族とか、盗賊に襲われることもないし……。平和は、良いことなんだろうけど……」

彼の言っていることは、なんとなくわかる気がした。

あちらの世界での日々は、怪我也多いし、突然襲われたりするし、訓練も怠れないし、という平和とは無縁の日々だった。

けれど、その分、魔法を使った曲芸なんかはすごくおもしろかったし、見たことのないレンガ造りの町並みは新鮮だったし、と飽き

ることのない日々だった。

無事に帰ってきたから、言えることなのだろうが、こちらの世界の科学より、ずっとあちらの世界の魔法の方が、便利で、楽しいものだった。

「まあ、いいんじゃないですか。妙な警戒心はらなくていいですし……」

「それはそうだけど……、なんか物足りないんだよね……」

「じゃあ、もう一回魔王倒してきてくださいよ、別世界で」

「いやいや、なんかそういう訳じゃないんだけどさあ……」

そんな会話をつつけながら、駅に行き、電車で待ち合わせ場所まで向かった。

* * * * *

2人は、駅の中にあるハンバーガーショップにいた。

「淳！！ 涼介！！ こっちこっち！！」

駅中を歩き回って2人を探している俺たちを、優華さんが見つけてくれたようで、ショップの外まで迎えに来てくれた。

彼女は、異世界から帰った時と何も変わらない姿だった。

茶色いボブは、あちらの世界でも染め直したり、切ったりと維持をしているようだったし、身長も、19歳にもなって急激に伸びることもないからだろう。

綺麗な目元と、ブラウンの瞳も相変わらず。全体的に、可愛いというよりは、綺麗という言葉が似合う女性だ。

だが、少しこちらの世界に合わせて、メイクをしっかりとやっているようには感じる。

160cm弱であろう身長は、ヒールで少し盛られ、170cmの俺と目線はあまり変わらなかった。

「淳も涼介もなんか小っちゃくなつたよね!! 淳なんか背伸びすれば追いつきそう」

彼女は爪先立ちをして、ヒールで高くなっている身長をさらに高くしようとする。

「それも今だけですから!! あと1年すれば俺ももう5センチ伸び直すんですから!!」

「まあ、淳の身長が5センチ伸びたところで俺には勝てないんだけどな!!」

優華さんへの反論を、涼さんは嘲笑った。彼はすでに180センチの長身だが、これから更に1年すると数センチ伸びる。身長で勝負する気さえ起きない。

俺たちが話しているのに気付いたのか、ゆあもショップから出てきた。

「いいの? 食事中だったんじゃない……」

ゆあにそう聞くと、

「ううん、飲み物だけ頼んだだけだったし、それもすぐ無くなった

やったから」

と言って、

「あの、これからなんですけど、他の人を気にしないでもいいように、カラオケに行きませんか？」

と提案した。優華さんとシヨップで打ち合わせをしていたのだからか。

彼女も、姿はほとんど変わっていないかった。

黒く大きな瞳、白い肌、150cmほどの小柄で細い体、目の上できれいに切りそろえられた、重ための前髪。

唯一変わったところといえば、腰まで伸びていた髪が、背中の中あたりまでに短くなったところだろうか。

透き通った声も相変わらずで、将来声優にでもなれるんじゃないか、というほどにかわいらしい声だ。

ゆあは高校の制服、優華さんは春らしいワンピースに身を包んでいて、相変わらずの仲の良さで、本当の姉妹の様だ。

「俺は賛成ですけど……、涼さんは？」

涼さんに同意を求めると、彼もうなずいてくれた。

「じゃあ、決定で」

ゆあはそう言って、ハンバーガーシヨップから歩いて3分ほどの場所にあるカラオケ店に向かって歩き始めた。

「ねえ、どうして2人とも体操服なの？」

歩きながら、優華さんが聞いてきた。

「ああ、今日球技大会だったんですよ。で、体操服登校だったんで」

涼さんは、優華さんの隣を歩きながらそう答える。

周りから見れば、美男美女カップルの微笑ましい一コマだろう。

優香さんのほうが、涼さんより1つ年上だが、2人は同い年、もしくは涼さんが年上に見えてしまう。

決して優華さんが幼いわけではなく、涼さんが大人っぽいのだ。

涼さんの服装が、体操服でないもったときちんとしたものであれば、の話だが。

「優華さん美人だし、涼さんはかっこいいですよね」

俺の隣で、ゆあが俺と同じ考えを呟いた。

「だよね……」

「ほんと、涼さんただの一般人にはもったいないくらいかっこいいですよ」

そういえば、彼女は涼さんがモデルであることを知らないのだ。

それは、いずれ気付くから放っておけば良いが、そんなセリフを普通に口にできるゆあも、色んな意味でかっこいい。

「ねえ、淳！！ 涼介、今日の球技大会のサッカーで優勝したって本当？」

優香さんが、突然俺の方を向いて聞いた。

「ええ、本当です。ちゃんと試合も出てましたよ。背が高いので、うちのチームもマークしてたんです」

「あぁね。背が高いだけね」

嫌味っぽく優華さんは呟く。

「違いますって!! ちゃんと活躍しました!!」

「どうなんですか？ 淳さん」

必死に反論する涼さんを笑いながらゆあが聞く。

「んー……、さほど」

実際のところはゴールを決めたり、アシストしたり、甚だしい活躍だったのだが、少し意地悪をした。

「やっぱり!! そう思ってた」

「私です」

優香さんとゆあさんは、きつと俺の言葉が嘘で、本当は活躍したと分かっているはずだが、それでも涼さんをいじり倒す。

「もういい!!」

涼さんはすねた振りをしながら、横目で俺の顔を見て、寂しげな表情を浮かべる。

「はいはい、嘘です。活躍してました!!」

俺がそういうと、彼の表情は一気に明るくなって、

「流石、分かってる!!!」

と、俺の隣にきて肩を無理矢理組んだ。

「やめてください、恥ずかしいです……!!!」

抵抗する俺を上から腕で押さえつけて、爽やかに彼は笑う。
そんな俺たちを見て、優華さんとゆあは2人で笑った。

* * * * *

「あっ、ここです、ここ」

しばらく、会話をしながら歩くと、カラオケ店があるビルについた。このビルの2階がカラオケ店だ。
階段を上り、3時間で部屋を取り、店員さんに指定された部屋に入った。

第12話 女の子に会いました。(後書き)

ゆあちゃ あああああん

読んで下さりありがとうございます。

誤字脱字等ありましたらご報告いただけると嬉しいです。

アドバイス等もお待ちしています!!

更新ペース下がるとかいつつ早いのは、

小説書いて、更新することで現実逃避出来るからです。うん。

あれです、これからもこんな感じですが、お願いします。

第13話 話し合いをしました。

お世辞にも広いとは言えない部屋に入って、それぞれが席に着いた。

そして、俺が話を切り出す。

「俺の召喚術なんですけど……」

今日、少しだけ涼さんと話した召喚についてだ。

正直、もうテストとしてでも、召喚しないほうがいい気がする。た。

どんなに隠れて召喚しても、きっと見つかってしまう可能性が高いと思っただからだ。

その考えを伝えようとしたとき、優華さんが俺の言葉を遮った。

「それなんだけど、場所は私の実家がここから車で2時間ほどの場所にあるから、そこを使って？」

「え、いや、あの……。俺はもう見つかったらアレだし、召喚しないでおこうと思っただんですけど……」

突然の言葉に驚いて、慌ててそう言っど、

「大丈夫だよ、うちの家の中にある森とか、グラウンドとか、体育館とか使えば大丈夫だから」

次元が違いすぎて理解できない。

森の中に家があるんじゃないのか？

家の傍にグラウンドがあるんじゃないのか？体育館があるんじゃないのか？

「だって、みんなに会いたいでしょ？ 1年間一緒に戦ったんだし……」

彼女は何も変わらず話を続けるが、みんなはその前の言葉を未だに理解できていない。

「あの……さ、家どんだけ広いの……」

みんなの気持ちを涼さんが代弁してくれた。

「そんなに広くないって!!」

優華さんはそう否定したが、きっと彼女にとっての広いは、俺たちとは桁が違うだろう。

きっと、彼女は所謂お金持ち、に分類される人種だ。

「正直、そんな実家が重たくて、家を出て大学に行ったんだけどね……」

彼女は最後に小さくそう添えて、一瞬暗い顔をしたが、次の瞬間には、

「なんでさ、魔法使えたのかな……。だって、魔法使える体質になっただけなら、もう戻ってるはずでしょ？」

と、いつもの明るい表情で言った。

最後の言葉はすごく気になったが、あまり触れない方が良かったらう。

そう思って、何も聞かないでおいた。
そして、優華さんの素朴な疑問の答えを知っている人なんていない。だから、憶測だけで会話は進む。

「多分、記憶というか、脳というか、そういうものなんじゃないんですかね？ ほら、記憶の保護はされてるんで……。ってことは脳の保護ってことで……。みたいなの？」

俺がそう言つと、

「でも、それじゃ魔法の使い方覚えれば誰でも魔法が使えることになるんじゃない？ 詠唱が分かれば……。」

と、涼さんが反論する。

「もともと、脳内には魔法を使う、っていう部分があつて、それは普段は使えないけど、異世界に行ったことで、それが覚醒した、とか」

新たな意見を述べたのはゆあ。

「うーん、それあるかもね……。魔法が当たり前の世界に行ったから、私たちも魔法が使えると思つて、脳が覚醒した、みたいなの……。簡単に言えばただの勘違いだけだ」

これは、優華さんの意見。

「でも、それなら魔法が使えなくて当たり前前の世界に戻つたんですから、魔法は使えなくなりませんか？」

「なんか、魔法を使う感覚が脳にしみついて、みたいなの」

俺の言葉に続いたのは涼さん。それに優華さんが同意する。

「あー、分かるかも。魔法って感覚論でしょ？ 結果」

「そうです！ なんか、光がともるイメージをして……、ハッッ！
！ みたいな」

「うんうん、やっぱそのイメージなんだよ……！」

何だか2人で盛り上がっているようだが、その感覚は分からなくもなかった。

「うーん……。考えても分からないんですよ、やっぱり。使えるものは使える、ありがたいたく利用させてもらえばいいんじゃないですか？」

盛り上がる優華さんと涼さんを止めたのはゆあの言葉。彼女の言う通り、結局考えたところで答えが出る問題ではないのだ。

色々と頭を悩ませるより、単純に使えるもんじゃ使える、とだけ考えていた方が楽なのかもしれない。

「そうだね。ありがたく使わせてもらおうか」

「うん、そうですね」

涼さんも優華さんも、最終的には同じ考えに落ち着いたようだ。問題は、これだけでは片付かない。

「で、魔法はどうするんですか、これから？」

ゆあが、そう尋ねると、

「そりゃ、使わない方がいいよ……」

と、当たり前のように、涼さんが答えた。

「でも、もし街で誰かに襲われたりしたときにとっさに使っちゃったり、ついついあっちの世界の癖で使っちゃったりしたら……」

「まあ、当然誰かしらにバレたらとんでもないニュースになるね」

ゆあの言葉に、俺が出来る限り冷静に意見を述べる。

「だけど、この力は隠しておくには大きすぎると思う……。だって、この力があれば、世界中で色んなことが出来るんだよ？ 治せなかった病気も治せるようになるかもしれない。だったら、少しでも役に立てるように……」

そう言ったのは、優華さん。

彼女は異世界でも、医療魔術師としてたくさんの人々の命を救ってきた。

だから、この世界でも同じようにしたいと考えているのだろう。

「でも、それはこの世界の道理から大きく外れるんじゃないですか？ 技術のように、誰かに教えることも、伝えることもできないんですよ？」

涼さんが、それに反論する。

「それでも、1人でも多くの命が助かるんなら……」

優華さんの言葉に、さらに涼さんが反論する。

「優華さんは、1人で世界に何万人も、何十万人もいる難病の人たちを救えるんですか？」

「それは……」

「魔法、なんていうこの世界にはないものを使うんですよ？ あつちの世界では、同じようにすべての国の人が、医療魔法による治療を受けられてましたけど、こつちじゃ違うんです……。目の前にいる患者だけを救って、あとは知らないフリなんて出来ないんですよ？」

「じゃあ、涼介はさ、目の前にいる患者を救うな、って言うの？」

すでにこの世界には医療にも、生活にも格差があるんだから、仕方のないことじゃないの？ 多くの助けられない命の中に少しでもある、助けられる命を救うべきじゃないの？」

「それとこれとは話が違います！！ 科学はどの国も必然的にこれから発展します。だけど、魔法は違う……。俺たちが死ねば、それで終わりなんです。だから、魔法なんて夢のようなものを使って、命を救ったら、俺たちが死んだあとの絶望が大きくなるんじゃないですか？」

2人は、それぞれの意見をぶつけ合う。

俺もゆあも、そんな2人に取り残されていた。

第13話 話し合いをしました。(後書き)

個人的には、涼さんの意見がいいです。

読んで下さりありがとうございました。

アドバイス等ありましたら、ぜひぜひお願いします。

第14話 喧嘩をしました。

「違うよ！！ 涼介は間違ってる……。魔法を使っても、命を助けるべきだよ！！」

「違ってるのは優華さんです！！ 俺たちは、力を隠して、ひっそり生きるべきなんです！！」

「涼介には分からないだけだよ……。人を助けて、その人本人や、家族に感謝される気持ちがある！」

「それくらい分かりますよ！！ 魔族を倒して、誰かを救った時と同じですから」

「じゃあ、こつちでもそうすればいいじゃん！！ この世界にいる悪人を、魔法で倒せばいい。火事だって、水魔法を使えば火を消せる。それでいいんじゃないの？ さっき言ってたじゃん。使えるものは、ありがたく使え、って！！」

「だから、それは個人とか、メンバー内での話です！！ それ以上に魔法の存在が知られたら、それを邪魔だと思ったり、悪用しようと思った奴らから、ひどい目に合わされるのは目に見えてます。見え見えのトラップに自分からかかる馬鹿はいませんよ！！」

変わらず口論を続ける2人を、とりあえず止めなければならぬ。

ゆあも、そう思っているようで、膝の上にある手で、制服のスカートを強く握りしめていた。

今までも、旅の中で意見が食い違い、喧嘩になることは少なくなかった。その度に、ゆあを中心にみんなが仲裁して、納得いくまで話し合った。

今回だって、きっと大丈夫なはずだ。

「2人とも、一回冷静になりましょうよ！！」

「そうですね！！ いったん、落ち着きましょう？」

ゆあと2人でなだめようとしても、

「黙ってて!!！」

「口出すなよ!!！」

と、聞く耳を持たず、口論を続ける。これも、今までにあったこと。

しかし、今回はここから違う展開を見せた。

「結局、涼介は自分を守りたいだけでしょ？ 魔法を隠せば、誰にも狙われないで、静かに過ごせるから！」

「違います!! 逆に優華さんは、目立ちたいだけじゃないんですか!? どうせ、全員を救うなんて無理なのに、見える命だけを、たまたま与えられた力で救って!! ただの偽善です、そんなの!!！」

さすがに、この言葉は言いすぎだ。

涼さんだつて、1年間共に旅をして、優華さんが偽善とか、そういうことではなく、純粹に自分よりも誰かを大切にしている、ということを知ったはずだ。

だから、もういい加減これ以上はまずい、と無理やりにも止めるため、立ち上がるうとしたときだった。

「違う……、偽善なんかじゃない!! もう帰る……。淳、ゆあ、ごめん」

優華さんはそう言って、カラオケ料金を机の上に置いて、部屋を出て行ってしまった。

彼女は泣いているのか、声が揺れて、瞳も赤いように見えた。

今までは、どんなに喧嘩をしても、こうやって誰かが出ていくことはなかった。

向こうの世界では、自分の居場所はこのメンバーがいる場所しかなかったから。

けど、今は、たくさんの逃げ道が出来てしまった。みんな、もと、この世界に友達がいて、家族がいる。

いくらだって、他に行くところはあるのだ。

「涼さん、追いかけて謝った方が……」

座ったままの涼さんにそう言うと、

「なんで俺が……。気分悪い……。悪いけど、俺も帰るわ。ごめんな……」

とだけ言って、料金を置いて部屋から出て行ってしまった。

涼さんも戸惑い、苛つき、冷静ではないのだろう。だから、自分から出ていく彼を止めることは出来なかった。

今までにない展開に、ゆあは固まってしまっている。

2人の意見が分からないわけではないし、正直、帰ってきてからどこかで衝突があることは想像していた。

俺たちの日常だったものが、突然非日常になる。避けられるものではなかっただろう。

それに加えて発覚した、『魔法が使える』という事実。

まだ、日常に戻れていない中で、それぞれが不安が生まれ、焦りが生まれたのかもしれない。

「ゆあ、どうする?」

とりあえず、何か話さないと、と声をかけた。

「もう、帰りましょうか!! それで……、それで……」

無理に明るく彼女は言うから、何だか辛くなる。

「そうだね、帰ろうか。遅くなると家族が心配するでしょ?」

そう言って、机の上に涼さんと優華さんがおいて行った2枚の千円札を取って、荷物を持ち立ち上がった。

彼女は何も答えないで、立ち上がり、荷物を持つ。

受付でお金を払って、無言のままカラオケ店を出た。

時刻は7時過ぎ。日は落ちてしまい、辺りを照らすのは街のネオンだけになっていた。

「家どの辺? もう暗いから送るよ?」

「気にしないでください、大丈夫ですから……」

「いやいや、何かあったら俺が大丈夫じゃないから……」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

彼女は、今いる街の中にある、Y高校に通っている。デザイン系の学科らしい。

自宅は、俺が家に帰る際に乗る電車と同じ電車に乗り、ここから4駅行ったところにあるそうだ。

「あの、淳さんはご家族心配されないんですか? 駅から10分くらい歩くので、遅くなりますよ?」

「ああ、俺1人暮らしたから大丈夫それより、ゆあは大丈夫なの?

帰り着くの8時くらいになるけど……」

駅へ向かいながら、お互いの事を心配する。

「私の家は、大丈夫です。何時でも、心配されないので……」

彼女はそう言って苦しそうに笑う。

1年間の旅の中で、ゆあのそんな表情を見たことがなかった俺には、

「そっか……」

と半ば独り言のように呟くことしかできなかった。

彼女の、そんな笑みを見たせいも、そんな言葉しか言えなかった不甲斐なさからか、俺までが苦しくなってきた。

この苦しさを解くには、彼女の苦しみの種を知らなければならぬ。い。

でも、そんなことを聞く勇気は俺にはなかった。

ゆあは、旅のなかでいつも中心になってけんかを止めていたし、バラバラになってしまいついときでも『大丈夫』、と言っていた。その性格は、こちらの世界に帰ってきたからといって変わるものなのだろうか。

ということは、彼女の悩みの種は、『何時に帰っても心配しない家族』にあるのだろうか。

結果を導き出せるはずのない自問を繰り返しながら、駅に向かい、電車に乗ってゆさぶられるのだった。

第14話 喧嘩をしました。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

誤字脱字等ありましたらご報告くださると嬉しいです。

もっと気軽にコメントを送って頂けるよう、

Web拍手を設置いたしました。

何かありましたら、そちらでも構いませんので、

お気軽にどうぞー!!

ではではー!!

第15話 大切な事に気づかされました。

彼女の家の最寄駅につき、駅を出た。

「家まで送るから……、どっち？」

まだ、どこか暗い表情のゆゑに、その声をかけると、

「あつ、こっちです」

と、はっとしたように、再び無理に明るく、苦しそうに笑ってそう答える。

旅の中では、一度も見せなかった表情を、この短時間で2回も見たのだから、優華さんや涼さんのことと同じくらい、彼女のことが気になった。

魔法とか魔族とか、そんな世界での当たり前が、この世界に通じるわけがない。変化とか、違いとか、そういったものがあって当然。分かっていても、俺の心はついてきてくれず、彼女のことを気にかかると。

「あの……、淳さん」

彼女は、下を向いて歩きながら呟く。

表情が分からないから、どうにか声で感情を読み取ろうとするが、何度考えても、あまり良い感情のようには思えなかった。

「何……?」

だから、俺にはいつもと変わらないように、と気を遣いながら聞くしかない。

「1人暮らし、寂しくないんですか？」

「え……？」

予想していなかった質問に、思わず驚いてしまったが、

「んー……。別に、自分で決めたことだから、寂しくはないかな。

親だって、流石に毎日じゃないけど、週に何回かは連絡くれるから」

と、言い、俺が1人暮らしになった経緯を説明した。

俺の斜め前を歩く彼女は、それを相槌を打ちながら聞いてくれた。

「どうしてこんなこと聞いたの？」

そう、彼女に尋ねた。

「何となく、です。ほら、一人って響きだけでなんか、もう、寂しいじゃないですか。だから……。このまま、バラバラになっちゃうんですかね……。それで、旅のメンバーは周りに私、ただ1人になるのかな、って……」

彼女は、下を向いていた顔を少しだけ上げて、そう言った。

きっと、カラオケ店の一件が響いているのだろう。

「そんなことないよ……。今まで大丈夫だったんだから……」

必死で、彼女を慰めようと、言葉を出す。

「今回は大丈夫でも、これからはどうか分からないじゃないですか……。だって、魔法を使うか、なんてことでこんなに大きなけんかになっちゃったから……。これから、もっともっと大きな問題があるかもしれない……。そしたら、もうダメなんじゃないかな、って……」

揺れる声で、言葉を呟く彼女に、俺は何と言えればいいか分からなかった。

「ごめんなさい……。信じなくちゃいけないのに……。この世界に戻ってきた途端不安になったんです……。みんな、学校とか、家族とか、バイトとか、恋人とか、仕事とかがあつて、私たちメンバー以外にも大切なものがいっぱいあるんだ、って。私たちに頼らなかつて、十分やつていけるから……」

必死に声にならない声で、言葉を紡ぐ彼女を見てみると、心臓がぐつと掴まれるような、そんな気持ちの悪い苦しさが生まれてきた。俺が少し前に考えていたことと、同じこと。逃げ道はいくらだつてあるということ。

正直、このメンバーなら、元に戻れると俺は信じている。だけど、ゆあは俺が考えていたよりずっとずっと、本当は弱くて1番みんなを心配していて、だから、今、こんなに不安になつていいのかもしれない。

気付いてあげられなかった。

本当は旅の中でも、1番仲間が崩れていくことを心配していたのはゆあだつたのだ。

彼女がけんかを止めていたのも、『大丈夫』と言っていたのも、ただの強がりだつたのかもしれない。

認めたくない現実を否定するために、必死だつたのかもしれない。

「ゆあ、大丈夫だよ……。今は、冷静じゃなくなってるけど、きつと落ち着いたら涼さんも、優華さんも謝るよ」

彼女への、慰めの言葉。

「淳さん、ごめんなさい……。こんな人間で……。馬鹿みたいに心配して、不安になって、誰かに頼ってばかりで……」

けれどそれは、ただの俺の気休めにしかならなかった。

ゆあは、ただ謝るだけで、そんな彼女に何も言っただげられないまま、彼女の家についてしまった。

どこにでもあるような閑静な住宅街。どこも、温かな光がともっているのに、彼女の家には、1つの光も灯っていない。

彼女の、『何時になっても心配されない』という言葉の意味が分かった気がした。

心配されるとか、どうかという問題ではなくて、きっと彼女が遅くに帰っても、家族は誰もまだ帰ってきていないからではないだろうか。

「ご家族まだなの？　大丈夫？」

「いいんです、もう慣れっこですから」

彼女はそう言って、道路に面した小さな門を開けた。

「今日は、送って頂いてありがとうございました。それから……。ごめんなさい。突然あんなこと言っちゃって……。気にしないでくださいね」

彼女は門を閉めて、今日3度目の苦しそうな笑みを浮かべた。

もう、そんなゆあを見ていられなかった。ただの、衝動。
ゆあが、必死に溜めていた不安が今日、溢れだしたように。

閉められたばかりの門を開けて、背中を向けて、玄関へと歩く彼
女の腕を、強く掴んだ。

第15話 大切な事に気づかされました。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

誤字脱字等ありましたら、ご報告いただけると嬉しいです。

また、アドバイス等もお待ちしています。

感想欄、メッセージ、Web拍手、どれでも構いません。

第16話 話を聞きました。

「淳……、さん？」

突然のことに驚き、彼女はそつと後ろを振り向く。

きつと、彼女の眼には、不安や、もどかしさ、情けなさでいっぱいなのなんとも不細工な俺の顔が映っただろう。

しかし、今はそんなことを気にしてられない。

「ごめん、何も気づけなくて……」

まとまらない単語を、なんとか1つの文に繋げる。

焦りを全く隠せていない自分が情けないが、それでも構わなかった。

「そんなんじゃないんです……。私も忘れてた気持ちなんです。1年間、つらくて、厳しい旅でしたけど、でも楽しかった……。そんな生活から、いきなり嫌な事とかでいっぱいなの、キツキツの世界に放り出されて、一気に全部思い出して、押し寄せて……。だから、その、なんていうか……」

必死で、俺やメンバーを庇おうとしているのだろう。

彼女の腕を掴んでいる方の俺の腕を、掴まれない方の手で、必死に握りしめていた。

その優しささえもが、今の俺にとっては苦しみだ。

「話したくないならそれでもいいから……。だから、せめて、そんな苦しそうに笑わないでよ……」

「ごめんなさい……。こんな……」

彼女は、それから大粒の涙を零しながら、謝り続けた。
もう、彼女は限界なのだ。それは、俺も同じで。

ただ、安心させたくて、泣き止んでほしくて、開いている腕で彼女の背中に手を回して、身体を引き寄せた。

彼女の腕を掴んでいた腕は、そつと頭の後ろに回す。

そして、泣きじゃくる彼女の顎が俺の肩にのるように、少し屈んで、そして、抱きしめた。

「ごめん、突然こんなこと……。でもさ、そんなに悲しそうなゆあ見てたらさ、その……。何ていうか……」

突然、抱きしめられて驚いているのか、彼女は何も言わない。嫌われてしまったのだろうか……。

付き合っているだとか、幼馴染だとか、特別な関係でない異性に突然こんなことをされたのだ。

俺の事を嫌いになっても不思議ではないし、仕方のないことなのかもしれない。

「あの……。淳さん？」

「何……？」

俺の顔の横で呟くゆあに、心の内が悟られないよう、必死に平然を装い答える。

「ごめんなさい……。迷惑かけて……」

「いいから、気にしないで……」

まだ謝り続ける彼女にそう言つと、

「一度出来た繋がりが消えることが、私にとって一番悲しいことなんです……。脆い繋がりがなら最初からない方がいいんです……」

と、俺の体操服の上着を強く握りしめながら言う。

「大丈夫、脆くないから、大丈夫……」

「分かってます……。でも信じれないんです……。昨日、今日で、家族がいない寂しさとか、一度失敗してからずっと避けて、今でも避けてる友人関係とか、全部一気に押し寄せてきて……。だけど、この7人の繋がりがあから、もう1人じゃないって思ったのに、今日、こんなにボロボロになって……」

嗚咽交じりに、彼女は俺に自分の中のことを、必死に伝えてくれた。

だから、俺も、一言一句聞き逃さぬよう、必死で言葉を追いかける。

「全部全部、思い出したから……。学校に行くのが辛かったこととか、家にいることも辛かったこととか、ずっと1人で寂しかったこととか……。1年間は楽しかったから、その分、今が苦しいんです。そうしたら、不安だらけになって、今までもあったただの喧嘩なのに、必要以上に不安になって……」

泣きじゃくる彼女の言葉を全て受け止める。

そして、なんと少しでも彼女を安心させたいと思った。

* * * * *

「淳さん、今日はありがとうございました……」

しばらくして、落ち着いたゆあは、俺にそう言って頭を下げた。

「いいから、気にしないで?」

「もうちょっと、家族とも友達とも上手くいくように頑張ってみます」

まだ赤い目で笑う彼女のその言葉が、何故かすごく嬉しかった。

彼女の話によれば、両親とも大きな会社の重役で、家に帰らないことも多く、帰ってきてても夜中で、次の日の朝早くに出て行ってしまっそうだ。

友人関係の失敗、というのも俺が聞く限りでは、中学時代に、一方的に裏切られて、苛められただけで、彼女は何も悪くなかった。その2つの大きな荷物を背負った彼女は、人付き合いが上手にできなくなっただけという。

異世界に召喚されたとき、それをチャンスに新たな繋がりを作った。それが俺たち。

今の彼女には、それが1番強い繋がりだったはずなのに、それが崩壊してしまいそうになった。

みんなが持っているこの世界での繋がり、つまり逃げ道は、彼女にはなかったのだ。

だから、それが辛くて、その辛さを吐き出す場所もなくて、溢れだしてしまっただろう。

そんな彼女が言った言葉は、失った繋がりを修復すること、または新たな繋がりを築くということ、それは大きな進歩だ。

「俺でいいなら、いつでも話聞くから」

「ありがとうございます」

彼女に手を振って、さきほど来た道をたどり、駅に向かう。

その間考えたのは、どうすれば涼さんと優華さんの意見の食い違いを止められるかということ、出した結論は、壮さんに相談する、という何とも情けないものだった。

第16話 話を聞きました。(後書き)

どういう展開w

読んで下さりありがとうございました。

誤字脱字等ありましたら、ご報告くださると嬉しいです。

アドバイスもお待ちしています！

先日から小説トップと後書きの下にWeb拍手を設置いたしました。
匿名でのコメント大歓迎です。

同時に、小説家になろうユーザー以外の方にも、

この小説へコメントを書いて頂けるように設定しました。

Web拍手へのコメントには、名前を書いて頂けた場合のみですが、
活動報告にてご返信させていただきます。

*気軽に匿名(名無し)ならコメント書いてもいいかな

*返信は欲しいけど、他の人にコメントは読まれたくない

*自分のユーザー名等がばれるのがいやだな

という方は、Web拍手の方をお使いください。

また、メッセージでのコメントでも構いませんので、

お気軽に一言でも書いて頂けたらな、と思います。

面倒な文章になってしまい申し訳ありません。

ではではー！！

第17話 男の子に会いました。

翌日。高校生である俺にとっては、ある意味で週の終わりである金曜日。

しかし、午前9時現在、学校にはおらず、高層ビルが並ぶ街の中心部から少し離れた場所に居た。

波のように押し寄せてくる人、排気ガスで濁った空気、自動車や街のモニターから流れる音。

異世界にはなかったもので溢れるこの世界の街は、ほんの数十分そこらを歩くだけで、くたくたに疲れてしまう。

自然に害を与えない魔法で発展した世界は、不便な点多かったが、住み心地はこの世界のどの場所より良かったのかもしれない。

それはそうと、なぜ俺がこんな時間にここに居るのかということだ。

喧嘩のことを壮さんに話したところ、今日がたまたま休業日だったということもあり、会ってくれることになったからだ。

もちろん今日、俺には学校があるわけだが、1日学校を休んだからと言って、下の上の成績がどうこうなるわけではないから、仮病で欠席した。

そして、壮さんの仕事場兼自宅があるというこの街まで、8 駅電車に揺さぶられ来たというわけだ。

どうやら、目の前にある茶色いレンガ造りの9階建てのビルの4階が、彼の仕事場兼自宅のようだ。

駅から20分ほど歩いただけだが、駅前の見上げるほど高いビルはこの辺りはなく、高くてもせいぜい十数階建てといったところ。

メールで教えてもらったビルの名前と、目の前に立つビルの名前

を何度も確認して、中に入った。

エレベーターで4階まで行き、降りてすぐ見えたのは階段。それを無視して右を向くと、『霧屋』と書かれた古びた表札が下がるドアがあった。

壮さんから聞いていた店の名前と一致し、安心してインターフォンを鳴らそうとしたが、見当たなかった。だから、仕方なく、

「すみませーん、仙崎ですが、霧島さんいますか？」

と恐る恐るドア越しに言ってみると、

「あー!! ごめんごめん、今いく!!」

と、壮さんの声が聞こえた。

しばらく、ドンドンと足音がして、扉が開かれた。

「ごめん、気づかなくて。入って」

ドアの向こうには、少し髪が短くなったようには感じるが、それ以外は何も変わらない壮さんの姿があった。

ただ、俺の身長が縮んだせいで、旅の終わりには同じくらいになっっていた身長が、少し俺の方が低くなってしまっていた。

黒縁メガネと、清楚な黒髪と白いシャツにグレーのスラックスという服装。やはり、筋肉は落ち、細くなった印象があった。

「おじやまします……」

彼に案内され、その『霧屋』に入って、まず見えたのはテーブルと、それを挟んでおかれた白い2脚の2人掛けであるソファ。

その奥には、パソコンが置かれたデスクや、本棚、観葉植物なんか置いてあった。

フローリングの床は綺麗に磨かれ、薄いベージュの壁紙にはシミ一つない。

彼の几帳面さが見える部屋だ。

「ほら、俺家で仕事してる、っていったでしょ？ この部屋がお客さんがくるところで、奥にあるドアの先が家。1人暮らしで、会社も1人でやってんだよね。今日は家の方で話してるから」

彼は綺麗なフローリングの床を構わず土足で歩いて行く。俺はなんだか、汚してしまうのが嫌で、軽く入り口で靴のつま先をトントン、と床にぶつけて土を落とし、彼のあとについていった。

「ごめんね。俺がみんなに言ったのに、話し合いに参加できなくて……」

彼は俺の少し前を歩きながら、ちいさく呟いた。

「いいんです。お仕事があるでしょうから……」

本当のところは、昨日壮さんがいたら、喧嘩は起きてもここまでひどくはならなかったのではないか、などと思ってしまった。

けれど、この世界に戻った今、みんな学校や仕事があって、異世界にいたときのように、今から話し合おうなどとは出来ないのだ。

それぞれが、この世界で生活をしているのだから。

「涼介と優華のことも心配だったけど、同じくらい淳とゆあのことも心配だったんだよね……。特にゆあが。やっぱり、1番このメンバーのことを気にかけて、心配して、大切にしているのは彼女だと思

うし」

「そうですよね……。彼女が1番……」

昨日の彼女の様子を思い出す。大切だから、不安になっていた。俺が、気づいてあげられなかったこと。

だけど、壮さんはそのことにとくに気が付いていたのだろう。自分が情けなくて仕方なかった。

「まあ、みんな色々あつて当然なんだからさ、そんなに重くなりすぎないようにね」

壮さんの優しい声が俺を包んだ。同時に、どれほど自分が重く、暗い表情をしていたのかと気付かされ、そのことでも情けなくなつた。

「こつちだよ」

必死で、その表情を少しでもまともなものにして、そう言った壮さんの方を見た。

霧屋の奥にあるドアを開けて俺を待っていた。

「ここからは土足じゃないんですか？」

「うん、そうそう」

霧屋の入り口には玄関は無かったが、ここにはそれがある。そこで靴を脱いで、部屋の様子を確認した。

まず見えたのは前に続く一本の廊下。右側には2つ扉があり、左側には1つ扉がある。

霧屋と同じ様子の床、壁で、靴なんかも綺麗に棚に収納されているようだった。

荷物はしまうと、どこにしまったか分からなくなるから、全部出しておいた方が逆に分かりやすい、なんて言っている俺と大違いの部屋だ。

「こつちがリビングね」

壮さんは、『男の1人暮らしの部屋』の格差を見せつけられ、やるせない気持ちになっている俺をよそに、左側の扉へと入っていた。

リビングも、彼の几帳面さがにじみ出ている場所だった。

フローリングの床や、壁紙がきれいなことはもちろん、部屋の中央に敷かれた黒いカーペットには1つの埃もついていない。

とりにあるのはキッチンだろうが、そこも含め机の上、椅子の上には一切の荷物はなく、全てしまわれているようだった。

そして、そのリビングの中央のカーペットの上で寝転がる男が1人と、テーブルの傍に置かれたソファに座る男が1人。

「おお。淳来たか」

「久しぶり!!! ……でもないか」

心臓まで響くような迫力のある低い声の男と、少し男性には高い声の男。

雄吾さんと、黎さんだった。

第17話 男の子に会いました。(後書き)

やっとこさ壮さん、黎さん、雄吾さん出てきました。

物語進むの遅くてすみません。

読んで下さりありがとうございます。

数日振りの投稿ですね。

指摘された点を色々で見直し、改稿しました。

どの点もストーリーの変更はありません。

誤字脱字、アドバイス等ありましたらお気軽にどうぞ…!!
Web拍手でのコメントは無記名で構いません。

ではでは…!!

第18話 コーヒーを飲みました。

「え……、壮さん！！ 2人も呼んでたんですか？」

雄吾さんの向かいのソファに座って、リビングに隣接するダイニングキッチンに向かっている彼に尋ねた。

「ああ、言っただけでなかったかな？ この問題はみんなで解決するべきものだと思うって、全部話して2人を呼んだんだ」

彼は、キッチンに立ち、コーヒーを淹れながら言った。しばらくすると、独特な良い香りが漂ってくる。

「皆コーヒー飲める？ 砂糖とミルクは？」

そう言いながらキッチンから出てきた彼は、トレイにサーバーと、何故かカップ3つと氷の入ったグラスを持っていた。

「俺はブラックで大丈夫っすよ」

仕事着なのか、濃混色のツナギを身にまとった雄吾さんは、予想通りのブラック。

少し筋肉は落ちたのかもしれないが、それでも胸板は厚く、常人の数倍の筋肉はあるだろう。

それに加えて、180cmを超える長身と、真っ黒に日焼けした肌。

きっと、街でこんな人が前から歩いてきたら、思わず避けてしまいたいようなほどに、怖い。

しかし、実際のところは、目は優しいし（敵が目の前に居たら別

だが）、いざというときは、1番に敵の前に出て助けしてくれるいい兄貴、といった感じだ。

「じゃあ、俺は砂糖と少し」

俺は、ブラックなんて飲めたもんじゃない、と角砂糖を1つ入れてもらった。

そして、もう1つのカップは、雄吾さんの隣に座った壮さんのもとにいき、グラスは黎さんに渡された。

「あれ？ コーヒー飲まないんですか？」

寝転んでいた身体を起こして、氷だけが入ったグラスを受け取った黎さんに尋ねると、

「俺は、これ……」

と、そばにおいてあった自分のリュックサックをまさぐり始めた。

動くたびに揺れる、栗色のフワフワの髪は、ワックスなどで立たせたりせず、少し長めの前髪を横に流して、流れを作る程度にしかいじっていないだろう。

そして、猫のように丸い瞳は、そこらの女子が羨ましがりそうなほどに大きい。

可愛い男性、という感じだろうか。それを、暖色系のゆるい服と165cmほどの高いとは言えない身長が際立たせている。

実際も、甘いものと悪戯が大好き、と色んな意味で可愛い子供のような彼だが、実際は20歳の大学3年生。成人しているのだ。

そんな彼が、満面の笑みで取り出したのはコーラ。しかも500

ミリペットボトル3本。

「みんな大好き、正義のコーラ!!」

彼は、そのうちの1本を開けて、グラスに注ぐ。そして、それを一気に身体へと流し込んだ。

「うまー!!! 異世界には無くて飲めなかった分、取り返さない
とね」

そして、続けて2杯目も一気に飲み干した。

あちらの世界での食事はほとんどが欧米の食事のようなものだったが、何故か味噌や醤油なんかもあり、和風の食事が出ることもあった。

しかし、飲み物に関しては、基本的には紅茶かコーヒー、水。緑茶やウーロン茶なんかは、どこかの国でしか飲めない、特産品だった。

ジュース、というのは果物や野菜の100%のものばかりで、コーラーやサイダーなんてものは存在せず、甘党の黎さんにはきついものだったのかもしれない。

「あの、皆さん。魔法についてなんですけど……」

砂糖が入っているとはいえ、やはり苦いコーヒーを1口だけ飲んで、話を切り出した。

「まあ、焦るなよ。急がばまわれ、って言うだろ？ 焦って出した結論なんか必要ねえよ」

雄吾さんはそう言って、コーヒーをおかわりした。

「でも、仲が悪い状態が続くのもアレですし……」

昨日のゆあの一件もあり、早急に解決するべきだ、と思っていた俺は、反論した。しかし、

「結局、喧嘩は涼と優華の問題だから。俺らが口を挟むことじゃないと思うんだよね」

と、3杯目のコーラを飲み干した黎さんにも言われてしまった。

「俺らが考えるべきは、涼と優華をどうやって仲直りさせるか、じゃなくて、魔法とどう付き合っていくか、ってことじゃないかな？それが分かれば、自然と優華と涼も仲直りするはずだし、分からなくなたって、きっとすぐに仲直りするよ。淳もそう思うでしょ？」

「それは、そうですね……」

正論なのであるが、その壮さんの意見には素直に頷けなかった。

「じゃあ、お前は涼か優華のどちらかに、無理やりにも相手の意見を読み込むように言うのか？ そうじゃないことぐらい、お前なら分かっているはずだ。まだ、この世界に戻ってきて、時間もそんなに経ってないし、みんな混乱してんだ。これくらいの衝突があったって不思議じゃないし、そんなに不安に思うこともないだろ」

雄吾さんの言葉。……俺は、ただ焦っていたのかもしれない。

まだ慣れない現実世界に、突然発覚した魔法が使えるという事実、それに伴い起きた喧嘩、初めて見るゆあの姿。

みんな、まだ不安で当然なのだ。心が揺れて当然なのだ。落ち着

かなくて当然なのだ。

ゆあだつて、壊れた原因の全てが喧嘩だった訳ではない。辛い生活で蓄積されたストレスが、喧嘩、ということを引きつけに溢れただけだろう。

考えれば分かることなのに、様々なことが起こりすぎて、俺自身がいっぱいで、焦ってしまった。

早く解決することも重要だが、一生つきまとうであろうこの問題を、今すぐに解決する方が、危ない。

壮さんや、黎さん、雄吾さんはそれを理解して落ち着いている。なのに、俺はただ急いでいるだけのガキなのだ。情けない。

「ごめんなさい、焦ってました……。ちょっと、落ち着きます」

それだけ言つて、目の前にあるカップの中のコーヒーを一気に飲み干した。

「淳、もう1杯飲む？」

壮さんの優しい声と笑顔に、すこし焦りが薄れた気がした。

「頂きます、砂糖もう少し多めで」

彼にそう頼んで、今度は角砂糖を2つ入れてもらう。しかし、

「おっ、その調子で淳も甘党になっちゃえよ！！ 1杯のコーヒー、6つの角砂糖、これ基本ね！！」

と、黎さんは謎のハイテンションで、俺のカップに更に1つ角砂糖を入れ、続けてもう1つ入れようとする。

「ちょー！！ せつかくのコーヒーが！！ 砂糖とけきれないじゃないですか！！」

「ちがうよ！！ 下に沈んだ砂糖をスプーンですくって食べるの！！ これ最高だから！ だからまだまだ！」

「それコーヒーじゃないですよ！！ ただの砂糖ですよ！！」

「んでね、ミルクは入れすぎちゃダメなんだよね！！ 個人的には、コーヒー6割、ミルク4割かな。あ、でもそこは淳に任せる！！ 好みだから！！」

「俺そんなに詳しくないですよ！！ てか、黎さんそんなもん飲んでよくそんな細い体系維持できますね……」

落ち着く、とはちょっと違うのかもしれないが、焦りが消えて、少し気分が軽くなった。

第18話 コーヒーを飲みました。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

誤字脱字等ありましたらご報告頂けると嬉しいです。

アドバイスもお待ちしています。

【改稿について】

ミルクと砂糖について、少々詳しくいたしました。

角砂糖の分量も増やしました。

ストーリーに影響はありませんので、ここで報告させていただきます。

第19話 召喚獣について考えました。

結局、黎さんに角砂糖を大量に投入され、甘ったるくなってしまったコーヒートを飲み干して、本題に入る。

「魔法について、なんですけど、俺まだ召喚術使えるか試せてないんです」

理由として大きいのは、やはり召喚獣の『姿』と、場所がないこと。

室内で召喚すれば、部屋や周りにある物をめちゃくちゃにしてしまつのは目に見えていることだし、中には体格的に部屋に入りきらないものも居る。

屋外で召喚するのは、他人に見られてしまつリスクを考えると難しい。

やはり、室内で召喚する方法が無難なのだろうが、どの召喚獣においても、隣人や上下の階の人に影響が出るのは目に見えていた。

一瞬だけ召喚する、という方法も考えたが、召喚獣と召喚者である俺の双方が『戻る』をいうことを考えなければだめなのだ。

珍しいもので埋めつくされたこの世界をみたみんなが、戻りたい、と思う訳がない。不可能だ。

「誰かしら召喚すればいいんでしょう？ 実験みたいなものだし。シルフとかは？ ほら、風の召喚獣の男の子。小っちゃいしいいんじゃない？」

相変わらずコーヒを飲みながら、黎さんは尋ねる。

「ダメです、黎さんも見たことあるでしょ？ あいつ、何だかんだいって子供ですから、周りに珍しいものがあると、なんでも近づいて吹き飛ばしたり、切り裂いたり、投げたり……。子供でも、召喚獣ですから力は強くて、壁なんか簡単に突き破っちゃいます」

シルフは外見は可愛らしい男の子だが、じつさいはただの悪戯小僧。俺の言うことを聞いてもらえるようになるまでは、誰よりも時間がかかった。

「じゃあ……、シャドウ！！ 大人しいし、周りに危害加えないんじゃない？」

「シャドウもダメです。あいつはただの影ですから物質をすり抜けられます。隣の部屋なんかに行かれたら即アウトです」

俺も、8体の召喚獣を思い出すが、どれもこの世界で、誰にも気づかれず召喚するのは難しかった。

「あつ……」

俺も黎さんもあきらめかけたその時、壮さんが何かに気付いたようだ。

「ウンディーネは？ 水の召喚獣！！」

「あの人は、実体を保っている間はいいですけど、液体の姿になったら、家から染み出して、外でまた実体を形成します。だから、アウトです」

俺も彼女が1番に出てきたのだが、液体になることが出来る、という彼女の大きな特徴を思い出し、あきらめていた。

「だから、要は染み出さなきゃいいんでしょ？」

「まあ、そうですね」

「だったら大丈夫だよ」

壮さんの言葉の意味を追う。そして、気づいた。

「お風呂……」

「そうそう」

なんでこんなことに今まで気付かなかったのだろう。馬鹿だ、俺は。

風呂場のような撥水をする場所ならば、彼女は液体化して染み出して行くことができない。

つまり、そこでなら彼女を召喚できるということ。簡単なことなのに、気づかなかった。

「まずは、召喚術が使えるか確認ね。それから、これからについて話し合おうか」

「そつすね……。やっぱり、現状を把握することが第一ですね」

壮さんの意見に雄吾さんが賛同し、俺と黎さんも頷いた。

「杖は？ 今日、持ってる？」

「ああ、あります」

もしも、に備えて杖を持ってきていて良かった。もちろん、あの長いまま持ってきたわけではない。

この杖は、1メートルほどの白い杖のうえに、直径8センチほどの白いガラス玉のようなものがのったものだ。

そして、その杖は魔法により、白いガラス玉のみの姿へすること

が出来る。

杖を持ち帰るときは、その姿にしリユックサクに詰め込んだのだ。そして、そのままの姿の杖が、鞆の中に入っている。

「そついや、旅のなかじゃほとんどガラス玉にしなかつたよね」

壮さんは、俺が取り出したガラス玉をまじまじと見つめながら言
った。

「はい。これをもとの姿に戻すのには時間がかかります。召喚術を行うには、縮めた形じゃ使えないので……。突然の襲撃に対応できませんからね」

「そつかそつか、それで防御したり、殴ったりしてたもんね」

彼は、小さな疑問が解けて嬉しそうに呟いた。

「あれはひどかったな。ガラス玉の部分で魔族殴り倒したり、どついたり。俺が肉体強化かけた素手で殴るよりひどかった」

そつ、嫌味つたらしく、懐かしい思い出を雄吾さんが語った。

彼の特殊魔法、肉体強化とはその名の通り、腕を鋼鉄のように固くしたり、移動速度を上げるため、足の筋肉に働きかけたりする魔法だ。

ゆあの天使術もそうなのだが、『特殊魔法』と呼ばれるそれらは、修行をすれば誰でも使えるわけではない。

生まれつき、その素質を持った者だけが発動できる魔法だ。召喚術もそれに入る。

それは、異世界に住む人も同じで、特にゆあの天使術なんかは1

0年に数人しか発動できない極めて珍しい魔法だ。

天使術のすべては、光に満ちた術で、その美しさから、まるで天使が下りてきたようだ、とその名がつけられたらしい。

旅の中で、ゆあが天使術を使える魔道士だと分かった瞬間、手を合わせて拝む人がいたりもした。

「いや、あれは魔法使うほどの敵でもないかな、って……。俺って、一応魔道士じゃなくて、召喚術士なんで、魔法あんまり得意じゃないんです。疲れるし。それに、ガラス玉で殴ってて見た目はひどいかもしれせんけど、威力はそんなにないですよ」

魔道士にとつては、上級魔法を連続で使うことなど当たり前のことなのかもしれない。

しかし、俺は上級魔法なんていくつかしか扱えないし、1回使うだけで大きく体力を消耗してしまう。

「とりあえず、壮さん風呂場貸してください！！　今から、召喚できるかやってみましょう！！」

黎さんが、2本目のコーラを空にして、3本目のコーラを手に立ち上がった。

「そうだな。淳、杖準備して？」

「はい」

この世界に帰ってきてから、魔法は一度も使っていなかった。しかし、みんなが使える、というのだから大丈夫なのだろう。

右の手のひらに乗せたガラス玉に、左手をそっと重ねた。

詠唱をし、軽く力を込める。すると、何とも懐かしい感覚に襲われる。自分のものじゃないような力が、心臓の奥から込み上げて、そして腕に伝わる感覚。

そして、その力はガラス玉へと流れ込む。

一瞬、ガラス玉が光り、何も見えなくなった。そして、次の瞬間にはしっかりと右手に杖が握られていた。

「とりあえず、俺もふつうの魔法は使えるみたいですね」

その杖を持ち、立ち上がり、1つ大きな背伸びをした。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

壮さんの合図で、リビングを出て、風呂場へと向かった。

第19話 召喚獣について考えました。(後書き)

調子に乗って1日2話投稿してみた。

読んで下さりありがとうございました。

誤字脱字等ありましたら、ご指摘いただけると嬉しいです。

また、アドバイス大歓迎です。

第20話 意見をまとめました。

風呂場に着いた俺は、予想通り、といった感じで無事にウンディ―ネを召喚することが出来た。

彼女は、召喚された場所が俺たちが住んでいた、科学の発達した世界だと知ると、液体となり辺りを見に行く、と言い出した。

もちろん浴槽に召喚し、しっかりと栓もしておいたためそれは叶わず、彼女は、

「つまらんのう。今日は帰るとするか」

と、ため息をついて、水流となり杖の中に吸い込まれていった。

最後に、困ったらいつでも呼べ、と呟いたのを、俺はしっかりと聞いていた。

もしかしたら、彼女はこの世界で、自分は異端な存在であると気付いていたのかもしれない。

表面上は、嫌々帰ったようだったが、本当は帰らなければならぬい、と悟っただろうか。

少し、召喚獣たちの姿を見られないように、と俺が考えすぎているのかもしれない、とも思った。

心配しなくなつて、きつとみんなは俺が言わなくても気付いて、どこかへ行ったりしなかっただろう。

皆を信じきれていなかった自分がいたことが、情けなかった。

* * * * *

「とりあえず、召喚術も使える、ってことか……」

「そうですね、全ての魔法が異世界と変わらず扱えるようです」

リビングに戻り、今度は黎さんもソファに座って話し合う。

俺の隣に黎さん、向かいには壮さん、その隣に雄吾さんといった形だ。

「とりあえず、みんなは魔法をどうしたいと思ってる？ 涼介は仲間の間でのみ使うべきだ、優華は世界のためにどんどん使っていくべきだ、って言ってるけど」

壮さんは、そう言って、すっかり冷めてしまったコーヒーをゆっくりと口に運ぶ。

「俺は、仲間の間でも使うべきじゃないと思ってる。この世界にないものは、一切使うべきじゃない。これは、この世界の道理を守るためだ」

雄吾さんは、壮さんの質問にそうはつきりと答え、ソファに深く腰を掛け直した。

「俺は仲間の間では使ってもいいと思います。せつかく与えられた力です。ただ腐らせるだけではダメなんじゃないか、って思うので……」

俺は、雄吾さんに続いて、壮さんにそう答えた。

「まあ、個人的な目的で、他人にばれる心配がないなら、便利なも

のだし使ってもいいと思うよ、俺も。雄吾の意見も分かるけどね」

壮さんの意見に雄吾さんは何か言いたげだったが、良い言葉が見つからなかったのか、結局何も口にしなかった。

「黎さんは？ どう思ってるんですか？」

先ほどから黙っている黎さんにそう振ると、

「……分からない。俺には、涼介の意見も、優華の意見も、どっちも分かるから……」

と言って、コーラのペットボトルに手を伸ばし、中身を半分ほど一気に飲んだ。

「珍しいな、黎が分からない、なんて」

壮さんは、黎さんを少し心配げに見つめる。

「すみません、今は何とも言えないんです」

軽く苦笑いをして、黎さんは残りのコーラを飲み干した。

今までの旅で、彼はいつも、きちんとした理由のある、自分の意見を持っていた。

それに、決断が早く、イエスかノーか、いつもはっきりしている人だったから、今回、彼がこうも悩むということは、奥に何かあるのだろう。

きちんとした理由があって、『分からない』と答えているはずだ。

「別に答えを焦る必要はないよ。ただ、分からない以上は、魔法を人前で使う、っていうことは出来ないけどね。使いたいんなら、それ相応の理由と覚悟が必要だよ」

壮さんの言葉に、黎さんはそつと頷いて、

「これは、俺だけの問題ではありませんから、軽はずみな行動はしませんよ。大丈夫です」

と笑った。いつもより、少し元気がない声だったが、深く尋ねるのも無神経すぎると、それ以上は誰も何もしなかった

「とりあえず、まだ魔法について情報がまとまったわけじゃない。俺から、優華に今はまだその時期じゃないとだけ言っておくよ。また、涼介と優華が落ち着いてから話し合おう」

壮さんが、今回の会議の総括をして、一応は解散となるが、もちろんすぐに帰る人はいない。

「せつかくだし、みんなでお話、お話!!」

黎さんは、鞆をまさぐり、何と更に3本のコーラと取り出した。一体何本携帯しているのだろうか。

「俺は午後から仕事だから、午前中だけ」

雄吾さんが着ているツナギは恐らく仕事着で、この後直接仕事へ向かうのだろう。彼は、袖を捲って、コーヒーに手を伸ばした。

「じゃあ、俺も少し居させてもらいます」

せつかくだから、と居させてもらうことにした。このメンバーもそうだが、7人全員の『少し』とか、『ちよっと』は長い。

異世界で、ちよっと飲み屋で話すつもりが、気づいたら日付が変わっていた、なんてこともざら。

それだけ、話題が尽きない、ということなのだが。

「おつ、じゃあ、お昼はピザでも頼もうか」

壮さんも乗り気だ。

「いやいや、向こうの世界のピザは最高にうまかったですからね。

今さらこの世界のデリバリーピザで満足できるか……」

「お前それほど味覚発達してねえだろ」

「雄吾さんに言われたくないですよ……」

「何で砂糖舐めて生きてるような人間に言われなきゃなんねえんだよ……」

雄吾さんと黎さんの口論をよそに、壮さんは電話でピザを注文する。

デリバリー、なんて響きから懐かしくて、それに2人の下らない口論も重なり自然と笑みがこぼれた。

* * * * *

ピザはまだか、と待ち飽きた黎さんとトランプで盛り上がる。何

だかんだ言いながら、結局黎さんはピザが楽しみなのだ。

「うっわ、また負けた……。何、淳って特殊訓練受けてんの？ トランプの」

「何ですか、トランプの特殊訓練って……」

「だってさ、手が風のようにシュッ、シュッ、って!!」

「それは俺が早いんじゃないかって、黎さんが遅いんですよ」

「うっそだ!! 俺中学んときクラスで5番だったもん!!」

「微妙なラインだな……」

下らない会話を繰り広げる横で、サラッと雄吾さんが衝撃的な事実を述べた。

「それはそうと、壮さんが霧屋だったなんて驚きましたよ」

そして、壮さんも衝撃的な事実を述べる。

「俺も、さっき雄吾のツナギ見て気付いたんだけど、新平会だったなんてな」

……え？ 異世界に召喚されたとき、赤の他人じゃなかったの？
まさかの、知ってましたパターンですか？

第20話 意見をまとめました。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

誤字脱字等ありましたら、ご報告頂けると嬉しいです。
アドバイスもお待ちしています。

第21話 神経衰弱をしました。

「異世界に召喚される前からお知り合いだったんですか？」

聞かずにはいらなかった。

俺は、霧屋という名も、新平会という名も今日初めて聞いたが、有名なものだろうか。

俺が、引越してきたばかりだから知らないだけなのだろうか。

「いや、霧屋って店を知ってただけだ。誰がやってるか、とかは知らなかった」

「俺も、新平会、つてのを知ってただけ。雄吾とか、召喚されて知り合ったよ」

2人の言葉に集中しすぎ、床にばら撒いたカードを混ぜていたことを忘れていた。

止まっていたてを再び動かして、カードを混ぜる。

「淳、次は……、神経衰弱！！俺、暗記力は抜群だから！！」

きつと、黎さんの耳にもこの事が入っているだろうが、気にせずカードの準備をしていた。

重ならないように、丁寧にカードを並べて、ジャンケンをしよう、と俺を急かす。

「じゃーんけーん……ポン！！」

結果は俺がパーで黎さんがグー。このゲームの場合、後攻が有利なため、俺はもちろん後攻を選択した。

「霧屋は有名ですからね。うちなんてちっせえ会社つすから」

「いやいや、新平会も十分有名だよ。仕事でもプライベートでも名前は何度も聞いたから」

「そんなこと霧屋に言われたって何の説得力もないっすよ。たくさんの情報が入ってくる会社ですから、小さい会社の名前が入って来たっておかしくないです」

「だから言ったでしょ、プライベートでも聞いた、って」

黎さんが最初の1枚を無駄なほど真剣に選んでいる間に、壮さんと雄吾さんの会話は進む。

そうやら、霧屋、というのは情報関係の仕事のようだ。それもかなり有名な。

「よっし!! 俺、これとこれ!! 見えた!!」

何が見えたのかは知らないが、選びに選んだからと言って、最初の1回で当たるものでもない。当然のことだが、カードは全く違う数字だった。

「そっぴや、霧屋の先代はどうされたんですか? 最近全く噂を聞かなくて」

「去年引退して、今は田舎で農業してるよ。うちの両親なんだけどね。新平会は新しいでしょ?」

「俺と平松、っていう俺の兄貴みたいな人とで、5年前に設立しました。一応副会長やってます。霧屋の歴史に比べたら、まだまだ餓鬼以下です……」

「やってる長さじゃないよ。うちも実際、明治からあるけど、ほとんど活動していない時期もあって、立ち直ったのはほんとここ30年ちよつとだから。うちの両親と祖父が色々としてね」

「それでもうちの6倍ですから……」

ある程度はカードゲームに集中しながら、2人の会話を聞く。

俺は、いくつかペアを作ることができ、足元には俺のカードがあったが、黎さんはまだ1ペアも作れていない。

この人にはスピードも暗記力もないのだろうか、なんて思っつまう。

2人の話を聞く限りでは、霧屋は代々続いている会社の様だ。先代の方はすごく有名で、優秀だった様子で、会社の歴史は100年を超えている。

活動が活発になったのはここ30年らしいが、それでも続いているのだからすごい。

「よっし……。俺のターンー!!」

黎さんは、何故か少し張り切って、カードを1周ぐるりと見回す。どうせまたカードは合わないのだろう……。なんて思っている。

「まず、これとこれが4、こつちとこつちが6……」

彼は、迷いなくカードをめくる。しかも、普通に考えれば、1枚めくって、そのカードの数字を確認し、もう1枚めくるはずだろうが、2枚同時にめくっている。

それが、何の数字なのか、それも全て当てながら。

「こつちはキング、これはエース……」

彼の手は止まらない。そして、一切止まることなく、40枚以上残っていたトランプを全てめくってしまった。

ここからは俺の予想なのだが、彼はペアを作れなかったんじゃないかと、作らなかつた。

そして、すべてのカードをめくって、何がどこにあるのか、全て覚えてしまっていたのだ。

暗記が得意だとか、そういうレベルのものじゃないんじゃないか？

壮さんと雄吾さんは、少し特殊で有名なお店で働いているようですごい、なんて思っていたが、まさか目の前にいる甘党がこんなにすごい人間だとは思っていなかった。

だから、その分、驚きが大きい。

「何者ですか……、黎さん」

「黎すごいね……」

「お前、その力旅の中じゃ一切発揮してなかつたよな……」

どうやら、俺が2人の会話を聞いていたように、2人もこちらのゲームの様子を見ていたらしく、驚きの声を上げていた。

雄吾さんが言っていたが、旅の中では一切この記憶力は活用されていなかった。

そもそも、覚える必要があるものがなかつたからだ。

これだけ瞬間で暗記できたら、テスト困らないだろな、なんて思った。

「黎大学生だよな？ 大学どこなの？」

暗記が出来るからといって成績が良いとは限らないが、頭が良いから暗記が出来るのなら、成績が良かったって不思議ではない。

もちろん、頭がいいと、成績が良いというのは違う話だから、成績が悪い可能性もあるのだが。

「T大学の医学部です」

彼は、机の上のコーラに手を伸ばしながら答える。

T大学は、この国で最も難しいとされる大学だ。しかも医学部。正直、努力でどうこうできるものではない、とも思ってしまうほどの場所だ。

目の前でおいしそうにコーラを飲む、小動物のように可愛らしい男の子が、そんな日本選りすぐりの秀才だなんてとても思えなかった。

「T大……、しかも医学部かよ」

雄吾さんも壮さんも、ただただ驚いている。

「あの、お二人のお仕事は？ 色々話されてましたけど」

そんなことは気にせず、黎さんが、俺も気になっていたことを聞いてくれた。

「ああ、言ってなかったね。俺は、霧屋っていう情報屋を1人でやってるよ。代々受け継いできた情報網を使って、迷子探しから財宝探しまで何でもやるけど、難しいお仕事はちょっと値がはるかな」

情報系の仕事の予想は見事的中したが、そんな仕事が現実世界にあるなんて思っていなかった。

小説だとか、映画だとか、そんな世界の中の物だと思っていた俺にとっては、その仕事が存在すること自体が驚きで、その道で有名な人が目の前にいる、なんて信じられない。

「俺は新平会、っていう会の副会長。そこは、業者相手に引っ越しやってんだ」

名前は少し怖いものだが、実際はきちんとしたお仕事。だから、なぜ有名なのか分からない。

「新平会は、そこらの高校に行っていないような人とか、行ったけど上手くいかなかった人、卒業したけど行くあてのない人、万引きだとかの軽犯罪の前科のある少年なんかを雇って、更生させてるんだよ」

俺の心の中の問いに答えてくれたのは壮さん。

ちよつと会員、というか社員というべきか分からないが、その人たちが特殊なのだ。

だから有名、というのもちよつと気の毒かもしれないが、悪いことではないとも思う。

まだまだ聞きたいことはたくさんあったが、待ち望んだピザの到着で、そんなことは忘れてしまった。

第21話 神経衰弱をしました。(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

第22話 ピザを食べました。

届いたシーフードピザを囲んで、食事の準備を始める。まだ熱いピザを冷まさぬように、と急いでお皿などの準備を始めるが、ピザが届く前にしていれば良かった、と思った。

案の定、お皿を準備して、テーブルを拭いて、としている間に少しピザは冷めてしまった。

「じゃあ、いただきます」

今まではゆあの役だった食事の前の挨拶を黎さんが言い始めるものだから、少し不思議な気分になる。

「いただきます、っと……」

小さく呟いて、ピザをお皿によそう。エビやイカ、ホタテなんかがつっぷりとのっている、トマトベースのソースがかかったピザ。少し焦げたチーズの香りも良くて、食欲がわいてくる。

「んー……、うまい!ー!」

壮さんは、蒸気で曇るメガネを外し、完全に食事モードへと突入している。

雄吾さんは無言でピザを口へと運んでいた。

黎さんは、片手にピザ、片手にコーラ持って、満面の笑みで食事をしている。

10分も経たないうちにピザの箱は空になり、片づけも済んでしまった。

そして、食事から今までの話へと中心を戻そうとしたとき、雄吾さんの携帯が鳴った。

少し席を外して、俺たちのところに戻ってくると、

「すまない。本当は今日は仕事夕方ちょっと行くだけだったが、急に入っちゃった。今日はこのへんで」

と言って、俺たちに軽く頭を下げた。帰って行ってしまった。

俺も軽く、頭を下げて、みんなも同じように頭を下げる。

別に帰ったことが悪いとか、そんなことを思っているわけではないが、みんなこの世界で生活しているのだ、と改めて感じさせられた。

そうすると、仕事をしている壮さんや雄吾さんが、ただの高校生の俺なんかにくらべたら、ずっとずっと大人に感じられて、寂しくなった。

そして、会話が再開する前に、今度は霧屋の電話が鳴る。

「ごめん、俺も今日行かなきゃいけないところが出来たから。ここ、使うなら使ってもいいけど」

しばらく電話で話した後、壮さんは申し訳なさそうにそう言った。

一瞬、黎さんと顔を見合わせて、主のいない家にいるのは何だか申し訳ない、と出て行くことにした。

「ごめんね、突然で」

何度も謝りながら身支度をする壮さんに、

「大丈夫です。お仕事ですから」

と言って、黎さんと霧屋を後にした。

* * * * *

「これからどうしよっか……」

大都会のど真ん中、高層ビルによって作られた日陰にあるベンチに座り、黎さんとうなだれていた。

「誰か誘って、遊びます？」

「みんなまだ学校だろうね……。お前なんかと違って真面目だから」

「あ、それ軽く心に刺さりました」

「本当？ おめでとう」

「あ、何かありがとうございます」

下らない会話をして時間をつぶそうと試みるが、どうしてかこういふときほど時間が経つのが遅く感じられる。

「なんかうるさいよね、この世界」

黎さんはそういつて、耳をふさぐフリをする。

俺も何度も感じていたことだが、忙しく歩く人たちの話し声、大きなモニターから流される広告、道路を走り去る車。

向こうの世界では、隣のベンチにすわる人たちの会話なんて嫌でも聞こえてきたのに、この世界では、隣に座る人の話し声を聞くのがやっと。

となりで携帯電話を使い通話するサラリーマンの声なんて、これっぽっちも聞こえないし、聞きたくもない。

「きっと耳がこのうるささに慣れていきますよ」

慣れることは、少し怖いことでもあるような気もするが、慣れてくれないやこの世界で生きられない。

選択肢は、1つだけなのだ。

「まあ、なんでも慣れればいいんだよね」

そう言って、笑う黎さんに言葉を返そうとしたとき、彼の携帯がそれを邪魔した。

「もしもし？ うん、うん。でも今友達といるから……。え？ 関係ない？ 分かった、分かった。何か欲しいものは？ 食べたものは？ 分かった。買ってく」

彼は口ではどこか面倒くさそうに話しているが、実際はすごく笑顔だった。恐らく、彼女さんだろう。

「彼女さんですか？」

「うん」

予想通りの返事をもらって、

「じゃあ、俺は邪魔ですね。今から行くんですよね？」

と、これからどうするかなんて決めていなかったが、とりあえず黎さんとは別れようとした。
しかし、

「いや、友達といる、っていったら彼女がさ、会いたい、っていうんだよ。悪いけど、一緒来てくれない？」

と、少し申し訳なさそうに言ってきた。

「いえ、でも彼女さんの家に行くんじゃないですか？ そしたら、俺とは入らない方がいいかなー、って」

仲間の彼女とはいえ、女性の家だし、会ったこともない女性。そんな人の家にあがるのは流石に出来ない、と必死に断った。

「いや、俺の家だよ。マンションだけだね。同棲してるから」

「ああ、そうなんですか……って、同棲！？」

思わず大きな声を出してしまった。大人とはいえまだ二十歳。同棲するには若すぎるような気がした。

相手がずっと大人で、その人の家だというなら話は少し違ってくるが、今までの感じでいくと、黎さんの家だし、相手は黎さんと同い年、また年下と考えるのが妥当だろう。

「とりあえず、それでも流石にお邪魔するのは……」

黎さんの家に行くのなら大歓迎だが、女性が住んでいるとなると話は別。もちろん断る。

「いやいや、逆にお願い!! 来て!!」

理由は分からないが、なぜか彼はどうしても俺に来てほしい様子。この後も何度もお願いしてきて、これで断るのは人間としてどうかとも思った。だから、

「分かりました。じゃあ、お邪魔します」

と、頷くことにした。

「本当!!? ありがとう!! じゃあ、いまからゼリー買って帰るから、行こう!!」

俺のその言葉で一気に表情を明るくした黎さんは、俺の手を引っ張って街の中を駆けだした。

第22話 ピザを食べました。(後書き)

更新が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

そんな状況の中、このお話を読んで下さったすべての皆様に感謝いたします。

これからも、更新ができない状態が続くと思います。

ですが、精一杯執筆させていただきます。

もしよろしければお付き合いください。

何かありましたら、コメント、メッセージ、Web拍手より
お気軽にお願いします。

第23話 少し視点を変えてみました。

彼に案内されるまま、コンビニでフルーツゼリーをいくつか買って、自宅であるマンションへと向かう。

バスに20分ほど乗って、そこからは少し歩かなければならないようだ。慣れないバスに、少し気分が悪くなったが、目的のバス停までなんとかたどり着いた。

「大丈夫……？」

きつと、ひどい色をしているであろう俺の顔を覗き込んで、黎さんは心配そうにつぶやいた。

「少し酔っただけなんで、大丈夫です……」

「んー……。でも、これから上り坂とかもあるし、ちょっと休んでいいっ？」

正直、今の状態で上り坂はきつい、と黎さんの好意に甘えて、近くの公園のベンチで休むことにした。

「ごめんなさい、彼女さん待ってるのに……」

「全然問題ないよ。俺が無理矢理連れてきたんだし」

「ちょっとだけ休んだら、すぐ行きますから」

ベンチに深く座って、深呼吸をすると、少しだけ胸の気持ち悪さが取れた気がした。

しばらく、ボーっと目の前の砂場を眺めていると、

「はい、これ」

と、黎さんが、いつ買ったのか、冷たいペットボトルの水をくれた。彼は、俺の隣に座って、大きく息をした。

「ありがとうございます」

お礼を言っ、水を一口飲むと、冷たさが胸の不快感を取り払ってくれるような気がした。

体調も回復してきて、そろそろ行きましよう、と言おうとしたとき、それを黎さんに遮られる。

「なあ、優華の意見さ、俺分からなくないんだよね」

彼が、そんな話題を突然に切り出すものだから、何故なのだろう、と不審に思いつつも、

「俺にも分かります。救える人がいるんだから、その人を救いたいたいって気持ち」

と、答えた。辺りには誰もいない、話しても大丈夫な状態であると確認は出来ていた。

その気持ちは嘘ではないが、けれども行動に移すわけにはいかない。その理由を付け加えた。

「でも、その行為は自分たちは自分の周りの人たちを危険にさらしちゃうし、この先永遠に受け継がれていく力じゃないですよ。だから、俺は反対なんです」

自分の考えを言葉にして、改めて自分の考えを理解する。そして、同時にそれが俺の意見で間違いはない、と確信した。

「そんなことくらい、優華は分かっていると思う。彼女、頭良いから。そんなこと全部考えたうえで、そうやって助けることを望んでるんじゃないかな？」

しかし、黎さんはもつと奥のことを考えていたようだ。そして、その考え方は俺には理解できないものだった。

「俺は、その考えが分かる気がするんだよね。彼女がどうして、そこまでして誰かを救いたいと願うかは分からないけど、もし、俺が彼女のような力を持っていたら、同じことを言っていたかもしれない」

黎さんは、そう言って小さく笑った。目は何処か遠くを見つめているようで、隣にいる彼が、何故か遠くに感じられた。

「俺には分かりません……。自分や、大切な人が傷つくと分かっているのに、他人を助けたいだなんて思う気持ち」

正直な感想を言葉にする。何だかんだ言って、俺だって大切なのは自分で、身近にいる人たちだ。

それは、誰だって同じなのだ。必死で、自分を守ることしか考えられない自分を、心の中で守った。

「魔法の存在が知られれば、誰にいつ、どこで狙われるかも分からない。もしかしたら、その狙いは自分だけじゃなくなって、関係のない友達とか、家族にまでいってしまうかもしれない。そんなことには耐えられませんから……」

黎さんに言った言葉は、自分を守るための言葉でもあった。

けれど、優華さんの言葉を思い返せば、少しこの考え方に合わない部分もある。

それについて、黎さんに尋ねてみた。

「でも、彼女はたくさん命を救えるとか、そういうもつと大きなことを言っていましたよね？ 身近な人1人なら、そつと治せばよかつたんじゃないですか？ わざわざメンバーに許可をとつたり、相談したりなんか……」

「本当に、この考えが正しいかどうかは、優華に聞かないと分からない。1つの可能性として、頭の中に入れておいてほしくて、この話をしたんだよね。まあ、今はあんまり重く考えないで。優華の考えていることは、彼女にしか分からないし、彼女にも分からないことだつてあるんだから」

俺の質問は黎さんに流されてしまった。でも、今はそれで良かったのかもしれない、とも思う。

ここ数日、色々なことが起こりすぎて、平和な世界に戻つても、その事実を味わえていなかった。

あまりゆつくりしていい問題ではないが、急いで解決している問題でもない。

冷静になるため、今だけではなくもつと先まで考えるため、少し、じっくりと考えるべき時期なのかもしれない。

「優華さんも色々考えてるんですよ……。もう少し、待ってみます。全部、整理がつくまで」

「うん。じゃあ、そろそろ行くところか？」

「あつ、はい」

とりあえず、今はこの問題は置いて、黎さんの家に向かうことに

した。

第23話 少し視点を変えてみました。(後書き)

久しぶりの更新です。
更新遅くてごめんなさい。

誤字脱字等ありましたら、ご報告していただけると嬉しいです。
アドバイスもお待ちしています。

コメント、メッセージ、Web拍手コメント、
どれでも構いませんのでお気軽にどうぞ!!

第24話 彼女さんに会いました。

黎さんのマンションまでは、そこから5分ほど坂を上った場所に
あった。

「ちょっと待ってて、多分アイツ部屋にいるから」

リビングに案内されてすぐ、黎さんはそう言って部屋を出て行っ
た。

周りには、彼女さんの趣味であろうピンクやオレンジの可愛らし
い小物が目立ち、きれいに整理整頓されている。

それが女性が住んでいる、ということを強調させているような気
がして、なんだか緊張した。

少しして、黎さんは彼女さんと一緒にリビングに戻ってきた。

「さゆみ、淳君。高校2年生の、やる気と元気がない顔をした面倒
くさがり屋さん」

「え？ 説明ひどくないですか……」

きつと第一印象は最悪だろうが、彼女、さゆみさんはそつと笑っ
てくれた。

セミロングの黒髪に、真っ白な肌。笑い方も、ちょっとした仕草
も上品で、お嬢様のような雰囲気を持っている。

もう春も終わりに近い上に室内だというのに、ワンピースの上か
ら少し厚めのパーカーを着ていた。

「篠田さゆみです。年は黎君のより下で、専門学校生。よろしくね」

アドレスの『sym』という文字を思い出す。どうやら、あのときの予想は当たっていたようだ。

「あ、ゼリー買ってきたんだよね!！」

黎さんはさきほど買ってきたゼリーを何故か自慢げに取り出して、スプーンを持ってくる。

「ちゃんと知ってるんだよね、『たっぷりフルーツナタデココゼリー!！」

「覚えててくれたんだ、2週間前くらいに買って気に入ってたの」「当たり前!！」はい、スプーン」

テーブルを3人で囲んでいるが、やはり俺は邪魔な存在にしか思えなくなってきた。

「さすが黎君だね。あ、さくらんぼあげる」

「お、ありがとう」

「アレできる? ヘタを口の中で結ぶやつ」

「出来ないし、まずこれヘタついてないし……」

「じゃあ、種飲み込むやつ!！」

「そんなの聞いたことないんですけど!！」

「やつぱりばれちゃった?」

「ばればれだよ……」

微笑ましい2人の光景を見ながら、考えてみて、黎さんのすごさを思い知る。

2週間前、といっても俺たちにとっては1年以上前のことなのだ。どれだけさゆみさんを大切に思っているかが分かる。

彼女はゆつくりと時間をかけてゼリーを食べた。それから、それが何をしているのか、どんなことが好きなのか、3人で語り、すこしだけ距離が縮まった気がする。

彼女は美容師になるために、専門学校に通っているそうで、今年生だそうだと。

黎さんとは4年も前から付き合っているらしい。

「んーじゃあ、そろそろ行くところかなあ」

30分ほど話しただろうか。彼女は、時計を確認して立ち上がり、用意していたのである鞆を持って、立ち上がった。

「ごめんね、用事あるんだ……。無理に来てもらった上に、出て行くとか……」

「いえ、気にしないでください。俺も楽しかったですから」

申し訳なさそうな彼女に、そう言った。

「ありがとう。また来てね。黎君、なんかここ数日急に大人っぽくなったちゃって遠く感じちゃうんだよね……」

それは、身体は元に戻っていても、1年間という日々を過ごしたから俺たちにとっては当然のことなのかもしれないが、周りから見れば急激な変化なのかもしれない。

気付かないところで、周りから『何かが違う』と感じられていても、おかしくはないのだろうか。

1年前に、帰ってくることは出来ても、完全に戻ることは出来ない、ということか。

「本当？ 背のびたとか!？」

「いや、そういう意味じゃないけど……。たまには牛乳でも飲んだら?。」

「牛乳苦手なんだって……。」

黎さんは頭が回るから、とつくの昔にそんなこと考えていたのかもしれない。

だからなのか、いつのも明るさと、ノリで難なく乗り切っていた。

やっと、元の世界に帰ってきたと感じ始めていたが、それと同時に何かが違う、どこかが違う、とも感じ始めていた。

それは、身長が少し縮んだとか、1歳若くなつたとか、そんなことからきていることじゃなくて、中身が、自分自身が、周りから少し離れてしまったような、不思議な感覚。

その感覚は俺たちだけのものじゃなくて、傍にいてくれる『大切な人』にとっても同じなのかもしれない。

「淳? どうした?。」

考え込んでいるうちに、難しい表情をしていたのか、黎さんが声をかけてくれた。

「あつ、大丈夫です……。」

「そう? ならいいけど……。」

きっと、彼は俺が何か考え事をしていたと気付いていたのだろうが、深くは聞いてこないでいてくれた。

「今からさゆみを駅まで送るんだけど、一緒に行く?。」

ほかにすることもないので、黎さんの言葉にうなずいて、彼の家を出て行った。

* * * * *

「じゃあ、行ってくるね。帰りはそんなに遅くならないだろうけど、もしお腹空いたら自分であるもの使って何か作って食べて。それから、レポート。USBメモリ失くしたから、作りなおした、って言うてたやつ。ソファの下に落ちてたから、リビングの棚の1番上に入れておいたから。それから……」

さゆみさんは、駅の改札の前で黎さんに色々と言っていた。いつものことなのか、黎さんはそれを携帯のメモ機能に書き込んでいる。こうやって見ていると、さゆみさんの方が年下には見えない。

「はいはい、分かった。じゃあ、気を付けて。迎えに来るから、電話して」

黎さんは、さゆみさんに手を振って送り出した。俺も軽く頭を下げて、彼女を見送った。

* * * * *

彼女の姿がホームへと消えたあと、俺は黎さんのマンションへ向かっていた。

最寄りの駅からは歩いて10分ほどかかる。

「さゆみさん、黎さんのお母さんみたいでしたよ。何か、てきぱき要件言って……」

黎さんの隣を歩きながら、そういうと、彼はどこか照れくさそうに、

「そういうところが、良いところなんだよね。うん」

と、笑っていった。

「ところで、用事ってなんだったんですか？　というか、今日専門学校お休みだったんですか？」

そういえば、と思い出した気になることをぶつける。

「あーっとね……。淳だから話しておかないとね。もしも、俺に何かあったときのため。さゆみもそれを望んでるだろうし」

何だか、突然重苦しい雰囲気が変わって、驚くが、少し低い位置にある黎さんの顔を見て、

「何ですか……？」

と、恐る恐る聞いた。

「さゆみ、普通に見えるだろうけど、病気なんだよね。もう、長くないんだよ」

「……え？」

突然のことに動揺を隠せず、声が漏れた。

それと同時に、彼はもう死期の近い恋人を置いたまま異世界に来て、どれだけ不安で、苦しかったのか考えさせられた。

いつ帰れるのかも分からない、帰れるのかさえ分からない。

残された時間の少ない彼女との時間をもしかしたら異世界で使い切ってしまうかもしれない。

そんな感情が混じる中、俺たちと知りもしない異世界の住民のために、魔王退治なんてしていたのだ。

何も気づかなくて、胸が締め付けられた。

結果、もといた場所には戻れたが、それでももとの時間に帰れると分かるまでの間、どれだけ苦しかったのだろうか。

それを感じさせなかったのか、俺が鈍感すぎるのか。

どちらにしろ、今の俺には黎さんの横顔を見ることがさえできなかった。

第24話 彼女さんに会いました。(後書き)

約2ヶ月ぶりです。

また、ちよつとずつ更新頑張ります。

完結まで、時間がかかってしまいそうですが、あたたかく見守って頂けたらと思います。

読んでくださりありがとうございました。

第25話 それぞれの問題をしりました。

今のままの空気が続くのにも耐えられなかったが、黎さんにかける言葉を見つけれられるわけもなく、ただ黙っていることしか出来なかった。

「ごめんね。急にこんな話して……。淳、いつでも落ち着いてるイメージだったから、大丈夫だと思ったけど、やっぱりかつたね……」

結果、黎さんにこうして謝罪の言葉を言わせてしまった。

悪いのは黎さんではなくて、悩んで悩んで大切な話を話してくれたのに、それをきちんと受け止めて、言葉を返せなかった俺なのに。

「でも、淳を信じてこのことを話して、この先のさゆみを任せることにしたことは本当で、俺とさゆみの願いに変わらないよ」

嬉しい言葉のはずが、寂しい言葉にしか感じられなかった。

1年間という、確かな時間を過ごしたことが抹消されたこの世界で、その事実を確かめられる唯一の存在たちに、これほどに頼ってもらえているのに、素直に頷くことはあまりにも難しかった。

「あの、やっぱり相談してみるべきじゃないですか？ 皆にさゆみさんのこと……。それで、あの、優華さんに病気を……」

この言葉が黎さんを苦しませるなんてことは、簡単に想像できていたはずなのに、俺は逃げ場を探して吐き出した。

「淳、こんなバカな願いおかしいとは思ってる。さつき会ったばかりの人のこと頼むなんて……。でもさ、もう耐えられないんだよ……」

まだ、黎さんの顔を見ることはできず、声からこの先の言葉を読み取ろうとしたが、それはどれも明るい言葉ではなかった。

「目の前に、俺の大切な人を助けられる人がいる。でも、それは別の大切な仲間を傷つけることにつながるんだよね……。魔法なんて存在しないはずのものを使って、仲間を傷つけてまで救って、それで俺もさゆみも幸せになれんのかな……」

「あの……。その……」

とりあえずの言葉さえ見つけられず、情けない気持ちでいっぱいになる。

「俺、皆を犠牲にしてまで、さゆみを助けたいなんて思ったりしてさ……。最低だよ……。諦めてたはずなのに。なあ、淳……。俺、どうすればいい……。？」

初めて聞く、震えた黎さんの不安げな声に、動揺を隠せなかった。かける言葉なんて見つからない。俺は、黎さんの辛さを軽減させられるだけの、そんな立派な言葉を知らなかった。

「ごめん、こんな話……。このまま一緒にいたら俺どうにかなりそうだ……。家まで送るから……。本当にごめん」

何ども謝る黎さんに何て言葉をかけたかさえ分からないまま、俺は黎さんの車で家まで送り届けてもらった。

* * * * *

月曜日。何も手につかず、疲れた気分の俺は、制服はきたものの、学校に行く気分にはなれず、玄関にすわりこんでいた。

どうしてか、そんなときに思い出すのは、つい先日までいた異世界のことで。

「ほんのついこの前なのに……」

ため息をついて、己の手のひらを見つめた。

この手で、おれはいくつもの命を奪ってきた。そんなこと、忘れられるわけではない。

なら、今度はこの世界で、今までは争いの手段だった魔法を使って、役に立つことをしていかなければならないのだろうか。

それが、どんなに自分にとって危険なことであっても。

そもそも、俺はこの世界に帰ってくるべきだったのだろうか。

異世界で、俺は英雄になった。

しかし、この世界でのおれはなんの取り柄もない、ただの高校生。勉強だつてこの1年で忘れてしまったことも多く、大きな遅れをとっている。

いつそ、あの世界で英雄ともてはやされながら暮らしていったほうが、幸せだったんじゃないか。

そんなことを思っているとき、思い出すのは異世界での生活だった。

7人での生活。

それは、あまりにも楽しくて、充実していて、今の生活とは違うスリルがあった。

必死だったあのときには分からなかったが、今の淡々とした生活は何とも味気なく、物足りない。

そう感じているのは俺だけだろうか。

涼さんはモデル、という特殊な人で、優華さんは立派な別荘をもつようなお金持ちで、黎さんは将来を期待される難関大学の医学部生で、壮さんは有名な情報屋で、雄吾さんはこのへんの不良を束ねている人で。

みんなみんな、俺とはちがって特別な人に思えた。いや、特別な人なんだ。

俺とは違う、俺とは違うんだ。

この世界でも、活躍できるんだ。

そのとき、1人の女の子の顔が思い浮かんだ。

「ゆあは……。ゆあは普通の人なのかな……」

彼女は、学校の事で悩んだり、家族のことで悩んだりするけど、それは普通の女の子だからの悩みなんじゃないだろうか。

俺と同じ、異世界での栄光と、現実での平凡のギャップに苦しんでいるんじゃないだろうか。

でも、少ししたら、そんなことはどうでもよくなっていた。

ただ、今までの生活に不満ばかりを零して、目の前の問題から逃れようと自分の醜さに、ため息をつくだけだった。

俺は、ただの高校生として生きていく。それ以上でも、それ以下でもない。

これが今までの生活に戻るだけなんだ。

そんなことが理解できないというか、理解したくない自分がいて情けなかった。

第25話 それぞれの問題をしりました。(後書き)

読んで下さりありがとうございました。

誤字脱字、アドバイス等ありましたら、

コメント、メッセージ、Web拍手から、

頂けたら嬉しいです。

第26話 大切な人がいなくなりました。

「重たい身体を引きずるように立ち上がった。

どうせ、このまま居ても同じことばかり考えてしまう。

そう思って、玄関の扉を開けて、今までの日常へと還ろうとしたとき。

ポケットの中で携帯が震えた。

そうして、また、日常が遠ざかる。

「誰だろう……？」

携帯を取り出して、確認すると優華さんからだった。

しかも、メールではなく電話。何事かと焦って、応答すると、

「あ……、淳？ ごめんね、突然。あの、その、何ていうか……、えっと、だから……」

明らかに様子のおかしい優華さんを落ち着かせようと、

「とりあえず、落ち着いてください。ゆっくりで大丈夫ですから……！」

と言ったが、そういう俺も落ち着いてはなかったらろう。

「ごめん……。あのね、ゆあがないの……。今日、朝8時に待ち合わせしてたのに、ゆあが来ないの……。遅刻かな、って思ったけど、それにしても遅すぎるし、連絡は来ないし……」

現在の時刻は午前9時半。約束の時間からは1時間半が経っている。

それに、真面目なゆあだから、遅刻するときは連絡をいれるだろう。

明らかに、おかしい。

「とりあえず、今、どこですか？ 俺行きますから……」

「でも、学校は？ この時間に電話出れるってことは行ってないんだろっけど……」

「そんなのどうでもいいですから!!」

余裕なんてものなかった。

ゆあが待ち合わせ場所に来ないのは、何らかの事件や事故に巻き込まれたからなのだろうか。

不安は募るだけだった。

「今、ゆあの高校のすぐ裏にあるファミレスに居るよ……。ゆあ、どうしたんだろっ……」

「すぐに行きますから、大丈夫です。優華さんは、そこに居てください」

「ありがとね、淳」

電話を切って、急いで自転車を走らせて駅に向かった。

目的地であるファミレスまでは、電車にのって、それから歩く必要がある。

どうしても、時間がかかってしまい、目的地のついたのは40分後のこと。

店内に入ると、そこには不安気な姿の優華さんがいた。

「優華さん、ゆあは……」

俺の問いに、彼女は無言で首を横に振る。

「そうですか……」

想像出来ていたことではあったが、それでもやはり不安になる。

「ゆあからの連絡は？」

「今日の朝、もうすぐ家を出る、っていうメールが最後。学校あるけど、午前中だけ休んでもらって、話をするつもりだったの」

優華さんはうつむいて、ため息をついた。

1年間、2人はずっと一緒だった。その相手からの連絡が途絶え、不安でいっぱいなのだろう。

俺には、そんな彼女にかける言葉が見つけれなかった。

「とりあえず、探しましょう!! 俺、家に行ってきますから」

「家、知ってるの?」

「はい、この前のカラオケのときに、彼女を家まで送ったんです」

「あの……ときか……」

あのとき、つまり、喧嘩をしたとき。

まだ、解決できていない問題がそこにはあって、彼女の表情が曇る。

「あのときは、私、ひどいことしちゃったよね。涼介には色々言っ
て、変な空気にしちゃって……。ごめんね」

「今はそれどころじゃないです!! ゆあを探しましょう!! 優

華さんだつて、あるとき、自分の考えがあつて、そう言ったんですよ？ なら、それでいいじゃないですか。喧嘩したつていいじゃないですか。問題は、それを今、考えて謝ることです」

「淳……？」

「いいから、はやく行きましよう！！」

自分でも訳が分からなくなるほどに、必死だった。

問題が山積みの今、動いていないと、押しつぶされそうだった。

* * * * *

「家まで行って、いなくなったら他のみんなにも連絡しましょう」

「うん……」

少しでも優華さんを不安にさせまいと、俺は落ち着いた行動を心がけるが、実際は彼女と一緒に、不安でいっぱいだった。

電車にゆられ、彼女の家の最寄駅まで行く。

その間も、優華さんはずっと携帯を握りしめて、ゆあからの連絡を待っていた。

ゆあの家からの最寄駅に着いて、近くに停まっていたタクシーに乗り、彼女の家を目指す。

ついこの前通った道。しっかりと覚えていた。

「ここです。ゆあの家……」

タクシーを降り、インターホンを鳴らしたが、反応はなく、誰かが家にいるようでもなかった。

「ゆあは、私に家を出るってメールして、家を出たんだね……」
「そうですね。家を出て、ゆあはどこに……」

彼女は家を出ていた。

ただの遅刻でも寝坊でもないことは明らかだった。

家から駅までの間。駅からファミレスまでの間。

そのどこかで、ゆあは何らかの事故や事件に巻き込まれた可能性が高い。

「壮さんに頼りましょう。あの人は、この世界では有名な情報屋みたいですし……」

「そうするしかないよね……」

彼女は、携帯をぐっと強く握りしめてしゃがみこんだ。

「何でかなあ。異世界じゃ、英雄になって、幸せのままかえってきたのに。新しい仲間と一緒に、何の問題もなく帰ってこれたはずなのに……。何で、何1つ上手くいかないで、問題ばかり積み重なっていくの……」

今にも泣き出しそうな声でしゃがみこむ優華さんを見て、ゆあを送った夜を思い出す。

答えなんて出るはずのない問題から逃れたくて、ひとつ大きな息をつき、壮さんへ電話をかけた。

第26話 大切な人がいなくなりました。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

誤字、脱字、アドバイス等ありましたら、
コメント、メッセージ、Web拍手から、
お気軽にお願いします。

第27話 搜索作戦開始しました。

「もしもし、お電話ありがとうございます。霧屋です」
「あつ、お仕事中にすみません、淳です」

携帯にかけてもつながらないかもしれない、と確実な仕事場へと電話をした。

「淳か。どうしたの？」

「あの、今お時間大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫」

彼の声の向こうでは、カタカタとパソコンのキーボードを打つ音が響いている。

恐らく、仕事をしながら電話をしているのだろう。その優しさに感謝した。

「ゆあと連絡がとれなくなっただんです。優華さんとの待ち合わせに遅刻して、一切連絡も取れなくて、家にも行っただんですが、そこにもいなくて……」

「電話もメールもないの？」

「はい、優華さんが何度もしたそうなんです、駄目でした」

「そっか……。心配だね……」

壮さんは電話の向こうで大きく、ため息をついた。

「俺の情報屋は、ある程度色んな所に回った情報しか集められないんだ。少しでも世に漏れた情報をかき集めて、必要な情報を探して

いくから、こつやつてついさつき居なくなった人の居場所を探すのには向いてないんだよね」

いくら有名な情報屋だからといっても、無理なことはある。分かってはいるはずだったが、やはり気持ちは下がる。

「ゆあからの連絡を待つしかないんですか……？」

「いや、俺の情報屋が向いていないだけだよ。こんなときは、雄吾に頼んだ方がいいんじゃないかな。ほら、ここらへんにたむろしている若者も使つて、足で探せるから」

「分かりました、俺連絡してみます」

「うん、こつちはゆあの写真とか印刷して、配れるように準備してくよ」

「写真持つてるんですか？」

「まあ……、それは、ちょっと特殊な方法でなんとかするから……」

「分かりました……」

彼の反応からして、合法的なやり方ではないかもしれないが、こつなつてしまつたら仕方ない。

最後感謝の言葉を添え、電話を切り、すぐに雄吾さんにかける。

「もしもし、淳、どうした？」

「あ、お仕事中にすみません。実は……」

事情を話し、知り合いにも搜索を頼むようお願いすると、快く承諾してくれた。

「俺は仕事が終わる次第行く。すぐに行けなくて申し訳ねえ……」

「いえ、十分助かってます……。ありがとうございます。あの、写

真の準備の都合とかがあるんですが、何人くらいに手伝わってもらえますか？」

「多分平日だが、学校行ってないようなやつらも使うから、50弱くらいか？ 少ないか？」

「いえいえ、十分です……」

50人という人数に驚きつつも、雄吾さんと壮さんの力の大きさに改めて感謝した。

同時に、何も出来ない自分が情けなくもあつたが、今はそんなことを考えている暇はない。

とりあえず、40分後にゆあの家近くの公園に来るよう指示してもらい、俺と優華さんは霧屋へ印刷してもらった写真を取りに行くことにした。

* * * * *

「これ、一応人数が増えたときのことも考えて70枚用意してあるから」

「ありがとうございます」

頭を上げて、壮さんから封筒を受け取った。

中身を確認してみると、どこから入手したのか、中学校の卒業アルバムの写真であろうものの横に、身長などの特徴が書かれた紙が入っていた。

「あの、淳。私、もう一度待ち合わせ先に行くってくる」

「はい、分かりました」

優香さんは、暗い顔をしていたが、瞳だけはしっかりと睨っていらしたから、その言葉にうなずいた。

俺は、自由に行動しやすいようにと、壮さんに原付を借りて、待ち合わせ先である公園へ向かった。

途中、すれ違う人の中にゆあの姿を探したが、見つめることはできないまま、公園についてしまった。

そこには、待ち合わせ時間前だというのに、すでに20人近い人がいて、その多くは高校の制服を着ており、2人ほど同じ高校の生徒もいた。

「あの、皆さん、初めまして。N高校2年、仙崎淳です。雄吾さんから聞いてると思います。写真を配るので、搜索お願いします」

軽く自己紹介をして、封筒の中の紙を配った。

「しっかりと探すわ。雄吾さんから、かなり信頼されてるみたいでまじ尊敬」

「俺ら、N高校の2年なんだけど、同じ学校の同い年に、そんなすごい人いるなんて思わなかった」

最後に紙を渡したのは同じ学校の制服を着た2人。どうやら学年も同じらしい。

雄吾さんと仲がいいだけで、こんなに羨ましがられるとは、彼のごさが計り知れない。

ここらの不良たちにとって、雄吾さんは憧れの人なのだろうか。

「他にもN高校の人はくるの？」

「どうだろう。N高にも俺らみたいなものそれなりにいるけど、雄吾さんと知り合いなのは少ないんじゃないかね？俺も、知り合いづたいでやっと知り合えたし」

「うん、俺らの知らないところで仲良くなってるやつがいたとしても2人、3人。仙崎も、そのひとりだけだな」

「淳でいいよ。2人とも、お願いします」

茶髪に、ピアスという普段なら絶対にかかわることのないような人たちだが、こんなときに頼れるなんて思っていなかった。

深く頭を下げると、二人は、

「そんな頭を下げられることじゃない。雄吾さんが信頼している淳の頼みだ。何でも聞くよ」

「あ、俺が愁うれで、こっこちが彰あき。ややこしいけど、覚えててくれたらまじ嬉しいから！」

と言って、近くに停めていた中型バイクに二人乗りをして走って行った。

それからも、来てくれた人に紙を配り、頭を下げてくださいました。見つけたときの連絡先として、俺の携帯番号を書いてもらっていたが、しばらくたって携帯はならない。

話を聞いた人は、ひととおり全員公園に来たようだったから、俺も原付に乗り、まずは優華さんのもとへ向かった。

第27話 搜索作戦開始しました。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

第28話 学校へ行くことにしました。

電車の時間に縛られないというのは、なんとも快適なもので、自分の好きな時間に思うように行動できる。

だから、こうやって、すぐに行きたい場所へ行けるのだ。

異世界でも、空間移動にはそれなりに時間がかかってしまうし、魔力の消費も大きく、移動だけでとても疲れてしまう。

そう考えると、この世界のバイクや車というものは非常に便利である。

その便利な原付で向かったのは、優華さんゆあと待ちあわせしていた店。

店内に入り、辺りを見回すと優華さんの姿がある。

彼女は、俺に気付いたのかこちらを見て、寂しげに、笑った。

「優華さん、こっちは写真も配って、皆に探してもらってます」

彼女のその笑顔に向けられる言葉は、ゆあの搜索が進んでいる、ということだけだった。

「私、何もできてないね……。あの時、私が自分勝手に意見をぶちまけたりしなかったら、こんなことにはならなかったんだよね……」

「そんな、優華さんのせいじゃ……」

「いいよ、気使わなくて。私が涼と喧嘩しなければ、こうやって待ち合わせをすることもなかったかもしれないんだから……」

「優華さんには優華さんの考え方があって当然ですから。優華さんが悪いわけじゃないですよ」

優華さんは、何も返さなかった。

とりあえずアイスコーヒーを2人分買って、そつと優華さんの前に置いておいた。

自分のぶんのアイスコーヒーに、甘いシロップとミルクをたっぷり入れて、口に運ぶ。

何とも甘つたるいそれは、疲れ切った頭を再び回転させるためにはちょうどよかった。

「ゆあ、探しましょう?」

コーヒーを一口飲んだ優華さんにそう言う。

「そういえば、学校にはまだ行ってないですよね。もしかしたら、どうしても学校にいかないといけなくなったけど、携帯の充電がきれてて連絡できなかったー、とかかもしれないですし」

続けてそう言ったが、それはわずかな可能性でしかなかった。

それでも、彼女の心に少しでも余裕ができるなら、何でも良かった。

「そつだよね、うん、そつだよ……。ゆあ、真面目だから」

優華さんは、そつと微笑んだ。

それは、この1年間見てきた彼女の微笑みだったから、偽りではないものであったから、俺もそつと微笑んだ。

「そうですね、ゆあ真面目なんですから、どうしても来い、ってなったら学校行くかもしれないですし」

「うん、学校、行くっ……!」

とりあえず、まだ残っているコーヒーを飲み干してから行くこと、甘ったるいコーヒーを胃へと一気に流し込んだ。

優華さんも、もう少して飲み終わるといふとき、携帯が震えた。電話だ。

誰だろう、と思い画面を確認すると涼さんだった。

「すみません、電話です」

やはり、今、優華さんの前で涼さんと電話するのは、と思い、席を立とうとすると、

「相手、涼介なんでしょ？ 変に気を遣わなくていいからね。今は、ゆあのことだけ考えてればいいから」

優華さんは、コーヒーを飲み干して、言った。俺の心を見透かしているかのような一言。

気を遣ったつもりが、逆に優華さんに気を遣わせてしまったようで、少し申し訳なかった。

「分かりました」

それだけ言って、電話に出る。

「もしもし、淳？ ゆあのこと聞いたよ！！ 俺、ちょうどゆあの学校の近くにいるんだけど、学校にはもう行った？ 俺、学校にくから！！」

涼さんは歩きながら話しているようで、マイクに風が当たったようなノイズ音がする。

「俺と優華さん、今ゆあの学校の裏のファミレスに居るんです。丁度、学校に行こうとしてて……。だから、一緒に……」
「分かった。今からそこまで行くから。優華さんと外に出てて」
「はい、分かりました」

涼さんも優華さんと同じ気持ちの様だった。というよりは、俺の考えが幼かったのかもしれない。

「優華さん、涼さんここまですぐ来れるみたいなので、一緒に外で待ちましよう」

「うん……」

彼女の表情は、まだ暗いものだったが、涼さんも手伝ってくれるとなり、少し安心したようだった。

* * * * *

「淳！ 優香さん！」

数分経った頃、涼さんが走りながらやってきた。
学校には行っていないかったようで、細身の白いシャツに、グレーのパンツを着ていた。

「すみません、待たせて」

涼さんは息を整えながら、そう言った。

「ううん、涼介来てくれるって知って、安心したよ。涼介、行動力あるから……」

「そんなに褒めても何も出ないですよ」

遠まわしに俺には行動力がないと言われているようではあったが、そつと笑いながら話す2人の姿に安心した。

学校への正門に向かって歩いている最中、涼さんが、

「この前は、俺、ひどいこと言ってますみませんでした」

と優華さんに言った。

「私もごめん。私も、色んなこと考えてなきゃで、余裕なくて……」

「俺、この世界の生活の忙しさとか、色んな事に焦ってて、それで

……」

「いいから、もう謝らないで。私にも、悪いところあったんだから

……。それより、今はゆあのことだよ」

「そつですね、ゆあ心配です……」

「何もなければいいけど……」

2人が仲直りできたようで安心した。しかし、その奥にある魔法という問題が解決したわけではない。

まだまだ、衝突の可能性は否定できないが、1年という期間、一緒に過ごしたということは確かだと、改めて感じた。

この世界では認められない1年間が、確かにあったのだ。

正門にたどり着き、そこから中に入った。

昼休みなのか、廊下の人通りは多い。

「まずは、職員室？」

「居るとしたら教室じゃないですかね？」

「いや、でも職員室でゆあのこと聞いた方が早いと……」

「じゃあ、二手に分かれようか。私、職員室いくから、涼介と淳は教室行つて。もし、ゆあがいなくても、友達からゆあが今日来てたか、とか行き総場所とか聞いてて」

「はい、分かりました」

「了解です」

話はまとまった。

涼さんと俺で、教室に行くことになったが、1年生ということしか分からない。

とりあえず、近くに居た男子学生に声をかけ、1年生の教室の場所を聞き、2人でそこへと向かった。

第28話 学校へ行くことになりました。(後書き)

読んで下さりありがとうございました。

更新ペースは遅いですが、のんびり付き合っていただけだと思います。

第29話 情報を集めました。

「あの、この廊下を曲がった先の廊下にあるのが、1年生の教室です。では……、あの」

「あーうん、ありがとう」

何故か緊張気味の男児生徒に、涼さんがお礼を言う。

彼は、ゆあのことを知らないようで、クラスを聞くことまでは出来なかった。

「んー、とりあえず、周りの子にゆあのこと聞いてみよう」
「そうですね」

この廊下は、2年生の教室が並ぶ廊下と、1年生の教室を結ぶ廊下の様で、人通りはあまり多くなかった。

涼さんと2人で、その廊下を歩いて教室へを向かう。

1年生の教室が並ぶ廊下に出たところで、近くにいた女子生徒に涼さんが声をかけた。

「ごめん、三谷ゆあ何組か分かる？」

「えっ、いや、その……。私……」

彼女は、涼さんに話しかけられ明らかに同様にしている。

「ねえ、あの……」

そんな彼女に、涼さんは再び聞き直そうとするが、それは近くにいた女子生徒たちにより遮られた。

「ねえ、あれ、あの人だよ……。ほら、モデルの……。!!」
「知ってる!! 涼介君だよ……。高崎涼介君!!」
「そうだ、そうだ! 最近よく雑誌に出てる……」
「なんでこんなところに……」
「てか、まじかつこよくない!？」

そうだ、涼さんは最近人気のモデルだったのだ。あまりにも身近にすぎで、そんなことも忘れてしまう。

一緒に召喚された涼さんを除く6人が、誰一人も彼が人気モデルと知らなかったことが、今でも不思議でたまらない。

きつと、今、書店に行けばかれが表紙を飾る雑誌をいくつも見ることができるだろう。

「えつと、あの、ゆあのことを……」
「あの、この学校で何してるんですか!？」
「応援してます、あの、握手……」
「ちよつと押さないで!!」
「今、アタシの足踏んだのどいつよ!!」

人気モデルである彼の登場に、ゆあのことを聞くどころではなくなった。

「ねえねえ!!」
「涼介君!!」

最初は笑顔で接していた涼さんだったが、自分の言葉を一切聞いてもらえないほどに女子生徒が騒ぎ立て、だんだんを困惑の表情を浮かべ、それは怒りの表情へと変わっていく。

「涼さん、いったん出ましよう……」

涼さんを囲む女子生徒の間をすり抜け、彼の腕をつかんだ。

「そんなことしてる時間ないから、このぐらい自分でどうにかするよ」

彼は明らかに苛ついている。

しかし、先ほどまでの表情とは違う、優ししくて爽やかな、いつもの涼さんの微笑みを俺には向けてくれた。

だから、俺も素直に頷くことができた。

「ねえ、君たち。俺の話、聞いてくれないかなー」

涼さんは、今までよりずっと声をはって、そう言う。

いつも雑誌などでは、優しく、爽やかな表情をしているであろう彼のそんな声に、怒り気味の表情に、あたりに冷たい空気がながれた。

「最初に言ったでしょ？ 三谷ゆあ。彼女に用事んだけど……」

そのあと、涼さんはいつものような爽やかな声で、そつと言う。

彼女たちに要らぬ心配をかけないため、出来る限り自然な形で、

ゆあのことを聞こうとしていた。

俺からすれば、いつものようなだけで、普段とはやはり雰囲気は違い、少々怖かったが、彼をよく知らない女子生徒たちにとっては、その声はまさに王子とでもいうのだろうか。

あつという間に、ゆあ情報が集まる。

「三谷さん、4組ですよ。今日は来てなかったですけど……」
「アタシ、朝電車で彼女見ましたよ。でも、時間的にも遅かったし、学校の近くの駅で降りたのに、登校してなかったから、どうしたのかなって思ってた……」

ゆあは、学校に来ていなかった。

しかし、家を出てから電車に乗り、この近くの駅で降りた、ということは分かった。

考えたくはないが、彼女に何かが起こっていた場合、それはこの辺りで、ということになる。

それからしばらく、沈黙が続いた。これ以上聞くのは、ゆあに何かがあったということを見んなに教えてしまうようなものだった。そして、もうここはあきらめて、優華さんのもとへ向かおうとしたとき、

「あっ！……！」

と、声がした。声の主は、1人の男子生徒だった。

野次馬として、この辺りに居たようだった。

「俺、今日1限目サボって、外に居たんですけど、そのとき三谷っばいやつ見ました。身長とか、黒髪とか、雰囲気とかは三谷っばかったんですけど、はっきりとは……」

有力な情報に、涼さんと顔を見合わせた。

これ以上深く聞き出すと、どうしてもゆあの今の状態を知られてしまう可能性がある。

どうしても見つからない場合は警察に頼るしかないが、出来れば公になる前にゆあを見つきたい。

そのためには、やはり彼に気付かれてしまっても、聞くしかないのだ。

涼さんともう一度顔を見合わせて、意志の確認をする。
とりあえず、人の多い場所では離せないため、

「ごめんなさい、ちょっと場所を移しても……？」

と男子生徒に言った。

「え？……ああ、はい……」

困惑しつつ、頷いてくれた彼を連れ、人気のなさそうな場所を探して校舎の中を進んだ。

第29話 情報を集めました。(後書き)

読んで下さりありがとうございました。

第30話 重要なことを知りました。

彼を連れ、たどり着いたのは、4階からさらに上の、屋上へと続く階段だった。

「ごめんね、こんな場所で」
「いえ……」

戸惑う彼に、涼さんが一言謝り、ゆあのことについて詳しく尋ねた。

「ゆあ、見たんですよ？ それはどこですか？ ゆあの様子は？」
「えっと……、学校の近くに小さな駄菓子屋があって、その辺です。他校の制服をきた男1人、女1人、それから大学生っぽい感じの男と一緒にたんで、学校休んで遊んでるんだと思って……」

「それから……、それから？」
「車に乗りました。シルバーの軽自動車です。全員が乗り込んですぐに走っていきました」

そのあとも、彼から車の特徴、走って行った方向など様々なことを聞いた。

さすがにナンバーまでは覚えていなかったが、それでも非常に大きな情報だった。

「あの、どうしてこんなこと聞くんですか？ もしかして、三谷に何か……？」

話し込んでいる間に、授業に入ってしまったのか、来た時よりも

静かに感じる階段に、不安げな彼の声が響く。

何を言えばいいのか分からず、俺と涼さんは顔を見合わせた。

やはり、気づかれてしまった。きちんと全てを話すべきか、誤魔化すべきか。

彼が、ゆあの状態を周りにいいまわるということは考えづらいが、それでも可能性はゼロではない。

どうすればいいのか、同じような考えが頭の中をいつたりきたりして、どんどん混乱していると、

「ごめんなさい、言えないこともありますよね……。ほんの数日前、ゆあの雰囲気が一気に変わったら、これと関係してるのかと思って、クラスのみんなには、適当にいつておきますね」

と男子生徒は、笑った。

「あの、その……」

彼の一言に、戸惑っていると、

「俺のことは気にしないでください。無理に聞くななんて好きじゃないですから。ゆあのこと、お願いします……」

と再び笑みを浮かべ、階段を下りて行った。

彼は、最後に彼女の事を『ゆあ』と言った。それに、彼女の雰囲気が変わったことを心配していたし、もしかしたらゆあと比較的親しい中にある人だったのかもしれない。

そして、恐らくゆあの上に何か起きたと悟っていた。

心配で、不安なはずなのに、笑って、何も聞かないでいたのだ。

俺は、彼に不安だけを与えて、その不安をとり除くどころか、ど

んどん肥大させてしまった。

申し訳ない気持ちで、胸の中が溢れて、どうすればいいのかわからなくなる。

「そんな顔しないで、あの子のためにも、ゆあ、探そうぜ」

そんな俺にを救ったのは、涼さんの声。優しく、温かい声。そして、頭をぼんぼん、と軽くたたいて、

「ほら、行くぞ」

と笑った。涼さんも、不安でいっぱいはずなのに、俺のことを気遣ってくれる。

それが、嬉しいようで、情けないようで、申し訳ないようで。俺がもっと強ければ、とひどく後悔した。強くなったのは俺ではなく、周りのみんなだったのかもしれない。

助けられて、進んでいったことを、自分が成長したのだと勘違いしたのかもしれない。

自分が、どうしよもないほどに、情けなかった。

だから、何かをしなければいけない。そんな感情が湧き出てくる。しなければいけないことは明らかだった。

「優華さんのところへ行つて、その駄菓子屋さんの方へ向かいましょう」

「もちろん」

涼さんと、お互い分かっていただろう次の行動を、声にして確認し、階段を駆け下りた。

* * * * *

「ゆあ、ごめん、私が駅まで行ったら……」

ゆあの情報を優華さんに話すと、彼女は瞳を潤わせながら、そう呟いた。

とりあえず、校舎を出て、グラウンドの隅に置かれていたベンチに優華さんを座らせる。

職員室で得られた情報は、彼女が来ていないということだけだった。

「優華さんは悪くないです。彼の話では、ゆあは自分から車に乗っていったそうです。だから、きつと事情があったんですよ」

「事情って何？ 用事が出来たら、連絡くらい出来るはずでしょ？ 連絡できないってことは……」

「それにもきつと事情が……」

「もつ分かんないよ……」

彼女はそう言って遠くを見つめた。

「淳、優華さんは落ち着くまで壮さんをお願いしよう。それから、俺と2人で駄菓子屋の方に行こうか」

「はい……」

今の優華さんをこれ以上は連れていけなかった。帰ってきた世界、魔法のこと、それが原因の涼さんとの喧嘩、それに加えて今回のゆ

あのこと。

きつと、彼女はもう精神的にいっぱいいっぱいだったのかもしれない。

俺たちに心配はかけまいと、ここまで一緒に来たが、限界がきてしまったのだろう。

「優華さん、ちょっと休んで下さい。俺が優華さんに迷惑かけたぶん、頑張りますから」

涼さんは、座っている優華さんに視線を合わせるためしゃがんで、そう言った。

「でも、私……」

「今の優華さん、すごい疲れた顔してます。ゆあが帰ってきたときに、そんな顔の優華さんみたら心配しますよ。だから、休んでてください」

優華さんは、そつと頷く。それを見て、安心した表情を浮かべた涼さんは、

「淳、今の情報を検索してくれてる皆に回して。その間に、俺、駅に停めてるバイク取ってくるから」

と言い、駅に向かって走り出した。

俺が搜索している人たちに連絡をしている間、優華さんはずっと遠くを見ていた。

そして、一通り連絡し終えて、ため息をつく。

「ねえ、淳」

優華さんは遠くを見たまま呟く。

「ゆあのこと、お願い。私にとっては、大切な妹なんだから」

そして、俺の顔を見た。

「お願い、淳」

真剣な優華さんの瞳にそっと頷いて、「はい」を返事をする。
遠くからは、涼さんのものであるうバイクの音が聞こえていた。

第30話 重要なことを知りました。（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

第31話 駄菓子屋さんに行きました。

涼さんはバイクの後ろに優華さんに乗せて、壮さんの家へ向かった。

恐らく、ここから壮さんの事務所に彼女を送り、戻ってくるまでに40分近くかかってしまうだろう。

だから、俺はその時間を無駄にしないようにと、搜索をしてくれている人たちに連絡を回した後、1人で駄菓子屋へと向うことになった。

一通り連絡を回し終え、駄菓子屋へ向かって歩きだした。それから、5分も歩かないうちに駄菓子屋が見えてきた。

いわゆる昭和の香り、というものがする店構え。店先では、優しいおばあさんが椅子に座り、膝の上で休んでいる猫の頭を撫でている。

きつと放課後になれば、近所の小学生や学校帰りの高校生がたくさんくるのだろう。

「あの、すみません」

俺は、おばあさんに声をかける。

「あら、こんな時間に高校生がくるなんてね。学校はどうしたの？
ちゃんと行かないとね」

おばあさんは優しくそういうと、店の奥に入っていく。

「いや、あの……」

人を探している、と続けようとしたが、すでにおばあさんは見えなくなっていた。

どうしようか、と考えていると、彼女は何かを取り出して帰ってきた。

「ほら、ジュース飲んで学校行きなさいね」

彼女が俺に手渡したのは瓶入りのオレンジジュース。

「いや、あの、俺は……人を」

「いいから、ほら、座って、座って」

おばあさんは俺の言葉なんて聞こうともせず、半ば強制的に近くにあった木の箱に座らせた。

時間が惜しい中、のんびりおばあさんとジュースを飲んでいる暇なんてなかったが、このままでは彼女に話を聞くこともできない。

冷たい瓶を持ったまま、頭を抱えていると、おばあさんは先ほど座っていた椅子に座り直し、

「で、何を聞きに来たのかしら。学校、行っていない理由もそこにあるのよね、きつと」

と、聞いた。

「え……？」

さつきから、俺の話なんか聞いていないと思っていたから、思いもしない言葉に反応できなかった。

「だから、さつきから焦って何か聞こうとしていたでしょう？ そのくらい、分かってますよ」

「でも、俺の話なんか……」

「今のあなたすごく疲れた顔をしてたからね。ちょっとゆっくりしなきゃ、求めている物何もかも失ってしまうよ。ほら、ゆっくり話しな」

おばあさんは、変わらない笑顔で俺に言ってくれた。俺の焦りは少し和らいで、さつきより冷静になれた気がした。

あのまま突っ走っていても、きつとどこかで転んでいた。今は、そう思う。

「あの、人を探してるんです。今日の朝……」

今までの経緯をおおまかに説明し、彼女に情報を求めた。

「ええ、朝見かけたわ。あなたのいう髪の綺麗な女の子がここを歩いていたときに、その車がそばに停まって、降りてきた3人が女の子に話しかけてたわ」

「それで、会話とかは聞こえました？」

「いいや、そこまではね。でも、最初、女の子は逃げようとしていたから助けようとしたんだけど、1人の女の子が何か一言言っただけで、彼女はその人たちに従って、車に乗り込んだわ」

「何か、一言……」

「ええ。それも、きつと文章ではなくて、単語だった気がするねえ……。それは聞こえたんだけど、カタカナの難しい言葉でね。何ていったか知らね……。キ……キ……何とかだったよ、確か」

「キ……ですか……」

その、1つの単語で、ゆあは相手たちに従わざるをえない状況に

なった。

この世界で、彼女がどんな生活をしていたかなんて知らなかったから、その単語を考え、そこから相手を探していくことは容易ではない。

しかし、考えたくはない可能性が1つだけあって、その場合のみ、俺にも単語の想像はつく。

というより、1つに絞り込めてしまう。

どう考えたってありえないことだが、万が一……。万が一の場合を考えて、だ。

「キリグリーマ……。キリグリーマ……。王国……」

考えたくはない可能性。それは、この世界では存在しないはずの1年が、この世界の誰かに知られてしまっているということ。

つまり、『魔法』という存在が、どこからか漏れ出しているということだ。

しかし、それは確定したわけではない。

おばあさんがそれを否定してくれれば、それだけで十分なのだ。彼女の反応を、じっと待つしかなかった。

「そう、その言葉だったわ。キリグリーマ」

おばあさんは、その単語を言いづらそうにはあるが確かに口にして、肯定した。

その瞬間、俺の頭は真っ白になったが、俺の中で何かが動き始めていることは確かだった。

それは、感情というものの一種であることに間違いはないのだが、

どうもほづつておいて良い感情ではないらしい。

それを証明するようには、鼓動が早まり、真っ白の頭で形にならない無数の考えが蠢く。

「ありがとうございます、おばあさん、俺、行かなきゃ……！」

感情の整理はつかないままだが、俺はじっとしてはいられなかった。

おばあさんに軽く頭を下げて、どこに行けばいいかなんて分からないまま走り出す。

そうでもしなければ、この危機感と恐怖に押し潰されてしまいうるさた。

第31話 駄菓子屋さんに行きました。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

久しぶりの更新になってしまいました…。

申し訳ありません。

これからも気長にお付き合い頂けたらと思います。

第32話 心が落ち着きました。

走ったところで、どこに向かうべきか分かっていない俺は、ただ茫然と立ち止まるしかない。

キリグリーマ王国を知っている人間、つまりは魔法の存在も知っているであろう人間にゆあは連れて行かれてしまった。

彼女の魔法という力、天使術という力を目的に、連れて行かれたのは分らないが、もしそうならば何をされるか分らない。

色んな考えが頭を巡るが、どの考えにおいても彼女の身に危険が迫っているのは確かだった。

考えれば考えるほど、ゆあを助けたくて、早く犯人を見つけだしたくて、怒りと不安で頭がいつぱいになる。

そんなとき、俺はおばあさんの言葉を思い出した。

焦るな、焦るな、落ち着け、落ち着け。

自分に言い聞かせて、何とか冷静さを取り戻そうとした。

何とか冷静さを取り戻した俺は、とりあえず、この事実を伝えなければならぬと、携帯電話を取り出して壮さんに電話をかけた。

『もしもし、淳？ どうしたの？』

いつもと変わらない優しい彼の声に、心が落ち着く。

「話は聞いてますよね？ 駄菓子屋のことか……」

『ああ、涼介から大体の事は聞いたよ。行ったの？』

「はい、そしたら……」

全てを彼に話した。彼のため息が受話器越しに俺の耳へ流れこむ。深い、深い、ため息だった。

しばしの沈黙の後、彼は言った。

「まずは、ゆあを連れて行った人たちの特定からだね。高校生は2人、制服を着ていたんでしょ？ ならその学校がまず特定できるはずだよ。こういうことはおばあさんよりも、高校生に聞く方が分かると思うから、ゆあの高校に戻って、さっきの生徒に話を詳しく聞いて。あと、出来る限りの容姿もね」

「分かりました……。すみません、制服のことあのとき聞いておけば……」

余計な手間を取らせてしまったことを謝罪すると、

「旅をしたときにも言ったよな？ 終わったことでそんなに謝らないで、それを取り返せるように動こう、って」

と、壮さんは笑った。

「すみません……」

「また謝ってるよ！ ふふっ、仕方ないね。それが淳だと思うから」「それって……」

「もちろん、それは淳の長所だと思うよ」

優しい壮さんの声に、久しぶりに微笑んだ。

「あ、あと、会話で得た情報はすぐに俺に連絡してね。生徒個人の特定を急ぐから。ある程度候補を絞ったら淳の携帯にメールで顔写

真を送って、男子生徒に確認をしてもらおう、っていう作業ね』

壮さんのスピーディーな言葉たちに飲み込まれそうになりながらも、ひとつひとつの言葉を逃さないように頭に叩き込む。

「分かりました。行ってきます」

『早くゆあを見つけないとね……』

ため息交じりの言葉で、壮さんも危機を感じているということが伝わる。

しかし、不思議と今までのような緊張や焦りは生まれなかった。

きっと、それは壮さんの存在のおかげだろう。彼の言葉はもちろん、居てくれるというのが、いつも俺に安心をくれて、心に余裕を作ってくれる。

『淳、ゆあのこと頼むよ。今残されたメンバーで、1番ゆあのことを任せられるのは淳なんだから』
「はい……」

携帯を閉じて、壮さんの最後の言葉の意味を考える。

単に、今ゆあの通う高校の近くにいるだけとか、そういうことに関係なく、壮さんは俺に任せると言ってくれているのだろうか。

壮さんが何を思ってそう言ってくれたのかは分からないが、ゆあのことを心配に思っているのは俺だけではなく、壮さんも同じだ。その壮さんが、そう言ってくれたのだから、今までと同じように全力をつくしてくしかない。改めて気合いを入れて、先ほどきた道を引き返した。

* * * * *

「すみません、何度も。あのとき一緒に全部聞いておけばよかったのですが……」

授業の合間の休憩時間にさきほどの男子生徒を見つけ出し、話を聞いた。

「いえ、気にしないでください。俺も、車の事だけじゃなくてもっと色々とお話すべきでしたから」

「助かります。それで、制服姿の男女のことなんですが……」

「あ、はい。実は俺、あまり制服に詳しくなくて……」

「どこの学校かまでは大丈夫ですから、特徴だけでもお願いします」

制服という、大きな情報を求める俺は必死だった。

「あの、ここらへんに3つ工業系の高校がありますよね？ そこつて、制服がよく似てて見分けられないんですが、その3つの学校のどれかだと思います。女子も男子もです。女子のセーラーのスカートは青で、男子は紺色のブレザーにグレーのチェックのスボンでした」

ここらへんには確かに3つ工業系の高校がある。まだ引越してきたとき、友人の慎に教わったことがある。

あのとき、制服についても何か言っていたはずだ。その言葉を必死に思い出す。

『全部一緒の制服に見えるだろ？ でも、スカーフが微妙に違うんだ。女子の制服はな、濃い青のスカーフがK工業高校で、淡い青のスカーフがG工業高校、水色のスカーフがI工業高校なんだよ』

思いだした。女子の制服について話すときの満面の笑みまで、はつきり思い出した。しかし、青のスカーフというだけでは、はつきりどの学校なのか言い切ることは出来ない。

どうしようか、頭を悩ませていたときに、さらに慎の言葉を思い出した。

『まあ、君みたいな人間にはまだ微妙なスカーフの色の違いで見分けるのは難しいだろうから、1つだけいい方法を教えてやるよ。いか、セーラーの襟がポイントだ。謎の切込みが入っていたら、K工業高校確定だから、覚えとけよ』

それを思い出して、俺は男子生徒に食いつくように聞いた。

「あの、襟とか覚えてますか？ セーラーの襟に、切込み入ってませんでしたか？」

「えっと、ちょっと思い出します……」

いくらゆあと一緒にいたからとはいえ、他校の生徒をそこまで観察する人は少ないだろう。今回のように、すこし雰囲気違った場合はどうかは分からないが、彼が見ていてくれれば、それだけで大きな手がかりになるのだ。

頑張っと思いついてくれと、目の前にいる男子生徒に願った。

「確か、入ってました、切込み……。いや、入ってました、絶対！ ゆあと話しているときに、その他校の生徒が制服の切込みいじってましたから……！！」

「本当ですか！！　ありがとうございます！！」

これで、その制服を着ていた女子生徒の学校が特定された。話を聞けば、男子生徒も同じ学校の制服を着ていた可能性が高いことも分かった。

「本当にありがとうございました。今から、その人物の特定を急ぐので、顔写真の確認をお願いしてもいいですか？」

「はい…。あの、ゆあに何かあったことくらい、もう分かっています。でも、きつと言えない事情があるんですよね？」

彼の言葉に、頷くしかなかった。

「あの、おれ、かなはばやしよしき金林良樹きつて言います。ゆあのこと、お願いします」

不安げに俺を見つめる金林君に、軽く頭を下げて、

「分かりました。ゆあのこと、心配しないで下さい」

と、言った。きつと、そういう俺の顔も同じように不安でいっぱいだったと思う。

その後、彼から聞いた情報を伝えるべく、壮さんに電話をかけた。

第32話 心が落ち着きました。(後書き)

お久しぶりです。

読んで下さりありがとうございます。

今時の高校にはなかなか入れないので、とご指摘を頂きました。そのことにつきましては、正直、あまり意識していませんでした。申し訳ありません。

また、後日活動報告にて、説明をさせていただきます。

活動報告だつたり独り言

Twitter <http://twitter.com/rinrinringna/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6642r/>

世界を救った、よしどうしよう

2011年11月7日13時04分発行